

---

# とある幻想殺しのエクシリア

カメヤン!!

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある幻想殺しのエクシリア

### 【Nコード】

N0326X

### 【作者名】

カメヤン!!

### 【あらすじ】

上条当麻は買い物の帰りよる途中、道端で赤い宝石を拾い、その時突如宝石が光りだし、目を覚ますと、そこは・・・

## プロローグ

ここは学園都市。

東京西部の未開拓地を一気に切り開いてつくられ、大小様々な教育機関に230万人もの住民を抱えるこの町、文字通り学生の町である。

その学生達というのも些かまともではなく、ここに住む学生のほとんどが何らかの超能力を持っている。

その超能力というのが、学生都市独自のカリキュラムと、進んでい科学力によって開発されたものである。

超能力の理論まで科学を用いて解き明かしてしまった…学園都市とは、そんな学園都市なのだ。

そんな中230万のうちの一人、上条当麻は両手にスーパーの買い物袋を携えながら自分の寮へとあるいていた。

2

「いやぁー！！ 今日たくさん買いましたたなー（＊＾▽＾＊）」

上条はたくさんさんの食材を買っていた。

あまりにも安さでたくさん買い込んでしまいとても上機嫌である。

「これだけあればいくらあの暴食シスターでも3日は持つだろう」

上条はこれだけあれば3日は持つと予想していた。

そんな上条が帰りよる途中、道端に赤い宝石が落ちていた。 上条

はそれを拾い上げ。

「ん？なんだコレ？・・・ 赤い宝石？

上条は宝石を見つめていた。

「（なんでこんな所に宝石が落ちてるんだ？・・・ とりあえず風紀委員に届けとくか・・・）」

上条が宝石を届けに行こうとした瞬間！

ピカァ――――！！！！！！

突如宝石が強くひかりだした。

「え？・・・ うわああああああああああああああ！！！！！！」

不幸の塊、上条当麻は学園都市から姿を消した。

## 第1話 幻想殺し〜異世界へ〜（前書き）

1話投稿！！

駄文ですが

宜しくお願いします。

## 第1話 幻想殺しと異世界へ

（第5診察室）

「ん．．．．．ここは？」

目が覚めた。

目が覚めたと同時に上条の目に写ってきたのは、どこか病室の天井。

「知らない．．．天井だ．．．」

なんだかそんな一言を咳かなくてはならないという勝手な思考が働き、思わずそんな一言を咳いてしまう上条。もちろんその言葉に対して返答する声はなく、それが今の一言があまりにも虚しいものだということを示していた。

しかしその時ドアが開き、

「気がつきました？もうお身体のほうは大丈夫ですか？」

「あ．．．ああ。もう大丈夫、助けてくれてありがとうな。」

「いえいえ、プランさんが町中で君が倒れているって言って、ここまで運んだんです。」

「そうだったのか。　ありがとうな。」

上条はそう聞き、素直にお礼を言った。

「そういえば此所は何処なんだ？」

上条が尋ねる。

上条は周りの風景を見てカエル顔の医者が務めるいつもの場所じゃないと自覚する。  
すると彼は。

「此所はタリム医学校ですけど。」

「（タリム．．．？聞いたことない学校だなあ．．．）」

「なあここは第何学区なんだ？」

上条は何学区か尋ねる。すると彼は。

「え．．．？　そういうのはないですけど？」

「え？　そういうのはない．．．？」

「はい。」

「ここは学園都市じゃないのか？」

上条はもしかしてと嫌な予感をたぎらせながらそう尋ねる。

「（学園都市？）．．．　此所はイル・ファンという町です。」

「．．．へ？．．．　いる．．．ふあん？．．．」

上条は聞いたこともない町の名を口にし、思考を働かせる。

「（も．．．もしかして、上条さんはまたとんでもない事件に巻き込まれたんじゃないか．．．．．）」

「．．．．．不幸だあ．．．．．」

「え？えっと．．．あの、大丈夫ですか！？どこか具合が悪いんですか？」

どうやら少年は、上条が頭を抱えていたからだというものの、どうやらこの少年、上条が悶絶している姿を見て、どこかが痛いのかもしれないと思ったようで、

「あ、ああ。特にそういうわけじゃないから大丈夫だ。

ありがとな、心配してくれて、えっと．．．」

名前を言おうとして、上条は少年の名前を知らないことに気付く。少年はそんな上条の様子に気付いたのか、

「あ、自己紹介が遅れましたね。

僕の名前は ジュード・マティスといいます。」

「ジュードか．．．．．俺は上条当麻っていうんだ。」

「上条当麻．．うん、じゃあ当麻さんと呼ばせてもらいますね。宜しくお願いします、当麻さん。」

「ああ、こちらこそ宜しくな、ジュード。あと、敬語は使わなくていいよ、見たところ、年齢とかあんまり変わらないみたいだし。」

「うん、わかった、それじゃ、宜しくね、．．．当麻。」



お互い自己紹介し、握手を交わした。

「所でここはどういう町なんだ？」

上条は訪ねる。

「ここは夜光の王都、イル・ファンといって、  
そして……」

ジュードは上条にこの町について説明をした。

リーゼ・マクシアの大国ラ・シュガルの王都、精霊術によって、  
植物を生きたまま組み上げて作りだした建物が立ち並ぶ大都市。日  
光のほとんどが地表に届かないが、最先端の精霊術により発行する  
樹木が街中に配置されていたり、街の中央には、  
一際巨大な発行樹によって作り上げられた、光り輝く宮殿がそびえ  
立つ。

ジュードの説明を聞いた上条は。

「……ナ、ナルホドー（？―？）」

正直チンプンカンプンであった。

「だ、大丈夫？なんか頭から煙吹いてるよ？……」

「あ、ああ……大丈夫だ、問題ない……」

上条はジュードに大丈夫と言い聞かす。

「（にしても、ジュードの説明によると ホントに俺は異世界に來たんだなあー。）」上条は改めてここが異世界に來たと実感する。

「ところで、当麻は何処から來たの？  
よくみたら、見慣れないカッコだけど。」

「え！？えっとですね．．．．．それは．．．．．」

上条は迷っていた。 実は俺、異世界から來ました、とは口が裂けても言えなかった。言っただとして信じて貰えそうにないと思った。そして上条が悩んでいるその時、ドアが開き。

「あ、あの！ ハウス先生見ませんでしたか？」

と、医学生らしき生徒が尋ねてきた。

## 第2話 く夜光の王都くイル・ファン（前書き）

2話投稿！！

駄文ですが

精一杯書いていきますので、どうかよろしくお願いします。

## 第2話　く夜光の王都くイル・ファン

「あ、あの、ハウス先生見ませんでしたか？」

そういえば、もう帰って来てもいいはずですけど．．．．．  
」

「何かあったんですか？」

「先生の研究がハオ賞に選ばれたと連絡が！」

「ええっ！？研究者最高の賞じゃないですかっ！」

「それで先方から早く連絡をして欲しいと。でも、先生ったら行き先を残してなくて」

「なら僕が迎えに行つてきます。

行き先は聞いてますから」

「いつも雑用みたいなことばかりさせてすみません。」

医学生 of 青年は申し訳なさそうな顔で謝罪する。

そしてジュードは外に外出するために服を着替えた。  
ジュードは上条の所に寄り、

「という訳で当麻、今から行かなければならないところがあるから。」

「ああ、わかった。」

「それじゃプランさん、彼をお願いします。」

「ええ。わかりました。」

「それじゃ、行ってきますね。」

ガチャ・・・バタツ

そしてジュードはこの部屋を出た。

「さてと、上条・・・くんだっけ？もうお身体は大丈夫？」

プランは上条に心配そうに尋ねる。

「あ、はい。おかげで大分楽になりました。」

「そう」

「あの、さっきハオ賞がどうのとかいってたけど、ハオ賞ってなんですか？」

「ああ、ハオ賞って言うのはね、精霊術の構造を明らかにした、大学者ハオを顕彰する財団が主催する精霊術研究者にとって最高の栄誉なの。」

「へえー、凄いですねえ！　その、ハウスさん。」

「そうね、ハウス先生は優秀で皆からは信頼されてて、尊敬できる研修者なの。先ほど用事で何処かへ行かれてたのだけど、あまりにも遅いから、ジュード先生が迎えに行ったのだけど・・・」

ちなみにハウスの行く先は、ジュードにだけ教え、他のみんなには秘密にしている。

「そうなんですか、それにしてもジュードはハウスさんのこと信頼してるんですね。」

「そうね。それにジュード先生は卒業後、ハウス先生の助手になるそうよ。」

「!？」

「それにハウス先生が居ないときでも、ハウス先生の代わりに患者さんを診てもらって治療しているの。そのおかげで患者さん達から評判高くて、とても有名なのよ。」

「……………（。□。）」

上条は口を開けながら唾然していた。

「（マ、マジデスカ……………あいつ、マジデ頭いいんだなあ。）」

上条は改めてジュードの事を感じた。年齢は自分と変わらないのに、頭も良く、成績優秀、将来も決まって、オマケに努力家、まさに金の卵である。

「……………それにくらべてオレは……………オレは……………」

「……………不幸ダァ……………」

心が折れた。

流石にこれだけ天と地の差を見せつけられたらハートブレイクになる。ましては同じ15歳でありながら尚更である。

拳句の果てには、どっかのビリビリや暴食シスターにも遠く及ばず。

「・・・・・・・・・・（チーン）」（▽。）

「ちょ・・ちょっと、上条くん？、なんで固まってるの！？  
しっかりして〜」

ユツサユツサ

プランはいきなり上条の思考についていけず思いっきり肩を揺さぶる！

そして我に戻った上条は

「・・・・・・・・・・スイマセン。ネマス・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・お休みなさい・・・・・・・・・・」

プランはなんて声をかければいいかわからず、オヤスミ、と告げた。

こうして上条はベッドに入り、泣きなら眠りについた。

〽数時間後〽

上条は目を覚ました。

「ん．．．．．ふわあああ、いつの間にか寝てしまったか。」

上条はふと時計を見て、ふと嘆いた。

「そういえばジュードのやつ、もう帰って来たのか？（ガチャ）．．．ん？」

するとドアが開いた。プランである。

「プランさん、ジュードは帰って来ましたか？」

「いいえ、まだよ、それよりさっきラシュガルの兵士に聞いたのだけど、ラフォート研究所に不審者が侵入したそうなの」

「侵入者！？」

「ええ、もしかしたら、ジュード先生に何かあったんじゃない．．．．．」

「．．．．．」

上条はプランの言うとうり、ジュードの身に何かあったと考える。あまりにも遅すぎる、きっとジュードは 何かに巻き込まれたにちがいないと、 上条は考える。

すると上条は、決心がついたかのように、立ち上がり、



「プランさん、俺、ジュードを探してきます。」

「な？駄目よ！、街にはラシュガル兵がいるのよ！ 下手に動いて、怪しまれでもしたら．．．．．」

「確かに、プランさんの言うとおり、街は危険ですし、今は下手に動かないほうがいい．．．．．でも！もし外にでらず、ここに残り、もしジュードの身に何かあったらもう遅いんですよ！？」

「．．．あ．．．」

「俺は後悔したくない。今すぐ行って、ジュードを助けたい、お願いします。」

上条は頭を下げる。

「．．．．．わかりました。」

「彼を、ジュード先生をお願いします。」

「はい！！」

上条は力強く答える。

## 主人公設定（前書き）

主人公設定です。

## 主人公設定

名前…上条当麻

年齢…15歳（もうすぐ16歳になる）

身長…168cm

性格…基本は気だるげかつ無気力で憂々とした性格であり、面倒だと思った事からは全身全霊を似て逃げようとする。

その一方で心根は熱く、困っている人を見れば老若男女・新交の有無・自身の危険一切不問で助けに行く性格で、超がつくほどのお人好しである。かなりの自虐ネタ好きにでもある。

記憶を失う以前は、自らを「偽善使い（フォックスワード）」と称して自嘲し、自分の無力さを卑下するなど比較的消極的な面も多かった。

容姿…ツンツンとした短めの黒髪をしており、それ以外にはこれと言った特徴が無い平凡な容姿。

体格は中肉中背だがやや筋肉質。

今の服装は、詰袖の上着のボタンを開け下にオレンジ色のTシャツを着ている。

靴は白地に赤ラインのプーマのスニーカーを愛用している。

「とある幻想殺しのエクシリア」の主人公。

不幸にも道端でリアルオーブを拾い、謎の光に包まれ、リーゼ・マクシアに来てしまう。ジュードとミラとの出会いで物語は大きく

変わる。

当麻は不幸体質で非常に運が悪く、よくトラブルに巻き込まれるが、その不幸の反面、女性絡みのトラブルでは最終的にラブコメチックで良さ気な雰囲気構築したり、女性の入浴や着替え・パンチラなどよく遭遇する。リーゼ・マクシアの世界でも強運（通称「カミジョー属性」）を発揮する。

しかし本人は恋愛沙汰に疎い上に超がつくほど鈍感。

回復魔法とかは幻想殺しにより、受け付かないが、グミは回復可能。さらに当麻が瀕死の時、とある人物から治療することにもなる。

戦闘…「幻想殺し」を利用して相手の能力や魔法を打ち消し、近接格闘に持ち込んで直接拳を叩きこむ事を基本戦術としている。

リーゼ・マクシアではジュードに、後にレイアから武身技を教わることになる。装備武器とかも、ジュードと同じ左右の装甲の量が違う手甲を装備。

クラスはジュードと同じ拳法使い。

秘奥義…まずはそのふざけた幻想をぶち殺す。

相手の懐に近づき、相手の顔面に拳を叩きつける。

まともに食らえば、気絶させることができる。

隠し秘奥義…竜王の顎

条件…当麻の右腕が切断。

当麻の右腕から出現した、透明な竜の頭。幻想殺しの効果は受け継いだ上で強化しているらしく、触れなくても異能攻撃を打ち消す事ができる。

これに頭から飲み込まれた対象の人物は、肉体には傷一つ負わないが、全ての記憶を消され、精神が崩壊する。

## 主人公設定（後書き）

結構長い主人公設定になりました？

ちなみに上条さんは リリカルオーブ持っているので成長させます。

それと、ジュードと同じ装備、同じスタイルでいきました。  
ぶっちゃけ上条さんはこの世界では、やはり無理かと思い、  
ジュードから教わり、成長させる事にしました。

それと、とある人物は もうすぐ登場させる予定です。

それではっ!!

### 第3話 幻想殺し〜新たなる旅立ち〜（前書き）

3話投稿です。今回は多めです。  
ついにミラ登場です。

ついでにアルヴィンも。

アルヴィン「ダレがついでだあ。」

### 第3話 幻想殺し〜新たなる旅立ち〜

当麻は今ジュードを捜す為。ラフォート研究所に向かっている。

外に出た時、当麻は驚愕した。

辺りを見渡すと、建物の上に植物が乗っていたり、まだお昼頃だというのに空は暗く、星空が綺麗だった。

「……………スゲーー！、学園都市でも絶対見れねえよ。」

「…………と、いけねえ、感傷に慕ってる場合じゃなかった。

ジュードを探しに行かないと、中央広場は…………こっちか。」

当麻はプランにラフォート研究所の行き方を教えてもらったので、まず中央広場に向かう。

そして中央広場に辿り着いた当麻は、周りを見渡すと、ラシユガルの兵士達が街の人達に聞き込みをしている。

「あれがプランさんが言っていたラシユガル兵か。」

当麻は鎧と兜を纏っている男を見て、直ぐにラシユガル兵と判断する。

「急いでジュードを探さねえと、…………えっと、研究所は…………こっちか?。」



当麻はラシュガル兵に警戒されないように急いで研究所に向かい、走る。

（イル・ファン学術研究地区）

当麻は研究所に向かい、走っている途中、当麻の視線には、女の人とラシュガル兵が居た。

女性の外見は、腰より長いボリウムのある金髪、頭にはねた髪の毛の一部は薄緑色をしている。瞳は赤紫。腹と太ももを露出した動きやそのような服装である。すると女性はラシュガル兵に剣を振り、攻撃するが、女性は剣の扱いが慣れてないせいか、スピードが遅かった。

ラシュガル兵は簡単に避けられる、それをラシュガル兵は、女性が体制を崩した為、それを右手に持っている槍を大きく振りかかろうとしていた。

「!?・・・危ないっ!!」

当麻は叫び、気がついたら彼女のもとに走っていた。当麻は勢いよくラシュガル兵に突進した。

「何?・・・ぐはぁあっ!!・・・」

ラシュガル兵は吹っ飛んで叫び、気絶した。

当麻は痛かったのか、肩を抑えて、顔が少し歪んでいた。

「（イテテ、勢いあまって激突しちまった（T|T）」  
相手は鎧を着ていたので当然である。

すると、彼女が声を掛けてきた。

「・・・誰だ？」

女性は突然乱入により驚いていた。

表情は変化してないが、内心ではいきなりであつた為驚いていた。

「えっと、とりあえず怪我はないか？」

当麻も少々どもりがちながらも、彼女に怪我はないかと尋ねる。

「ああ、怪我はない、ところでお前は「ミラ！」・・・ん？」

女性は、お前は誰だっ、と言おうとした瞬間、別の男が女性の名前を叫ぶ。

「・・・・・・・・・・ジュード!？」

「当麻!？どうしてここに？」

女性を呼んだ男性は、なんとジュードであつた。

「お前を捜しに来たんだよ、余りにも遅いから、プランさんから頼まれて探しに来たんだよ!。」

「そうだったんだ、ごめん、心配かけて」

「いいって、とりあえず無事でよかったよ!・・・・・・・・・・それよ

りなんかあったのか？」

「え、えーと、それはその・・・」

ジュードはなんて説明しようか考えてる時。

「どうやら知り合いのようだな。

そろそろ私は行くよ、ではな。」

「まって！街の入り口は、警備員がチェックしていることが多いんだ。海停の方が安全だと思うよ。」

ジュードはミラに安全な行き先を教える。

「む、そうか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ミラはそういい、辺りをキョロキョロしながら立ち止まったまま深く考える。

どうやら分からないようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハァー・・・・・・・・海停、

知らないんだね」

ジュードは小さくタメ息を吐き、尋ねる。  
するとジュードは。

「こっち」

「む、すまない」

ミラは申し訳なさそうに謝る。

そして海停へ向かう為に足を進める。

そして肝心の当麻は。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ア

レ??・・・・・・・・カミジョーサン・・・・・・・・クウキデスカ? (・|・)

」

忘れられていた(笑)

「ちょ、ちょっと待てよ、ジュード!」当麻はジュードのものを追う。

「ご、ゴメン! 当麻、今は彼女を送らないといけないから、説明は後でするから!」

「・・・ハア・・・わかったよ、けど、心配だから俺もついてくよ。」

「え?でも」

「気にすんなって、どうやら深い事情がありそうだけど、それでもやっぱ心配だしさ、俺もついて行くよ。」

当麻は状況を察しながらも、やはりジュードが心配なのか、そう言った。

「当麻・・・うん。わかった」

「それじゃ行こうぜっ」

そして当麻たちは再び足を進める。

「海停はここから街の丁度反対側なんだ、まず中央広場へ向かおう。タリム医学校前の方しか、海停へはいけないんだ。そして中央広場を抜けたら最初の角を右へ曲がって。」

「わかった」

「ここからだ、結構遠いな。」

ジュードが海停への行き先を案内し、海停へと急いだ。

広場を目指してると

「くしゅん！」

ミラがくしゅみをした。先程ジュードとミラは、とある事情で水に流されていた為、どうやらミラは風邪をひいていたようだ。

「大丈夫？ミラ」

「うう、イフリートがいれば、この程度すぐ乾くのだが……」

「なんかよくわかんねーけど、一体何があったんだ……？」

「イル・ファン海停」

当麻たちはなんとか街の警備兵からバレずに抜け出し、海停までたどり着いた。「なんとかたどり着いたな。」

当麻はそう言った。

海停の前には船が停船している。どうやらまもなく出航するようだ。

そして船の元まで近づこうとしたその時。

「その三人、待て！」

「へ？」

「え．．．．．何？」

突然声をかけられ、当麻とジュードは後ろを振り向いた。すると

「先生？タリム医院のジュード先生？」

すると周囲に4人の兵士が近づき、1人の男がジュードの名前を呼ぶ。

「あなた．．．．．エデさん？」

「何がどうなってるんですか？」

「知り合いか？」

「う、うん」

当麻はジュードに聞いて、ジュードは傾く。

「先生が要逮捕だなんて．．．．．」

エデという男は、悲しい表情でそう呟いた。そして。

「．．．．．ジュード・マテイス。逮捕状が出ている。そっちの

女もだ。」

「軍特法により応戦許可も出ている。抵抗しないで欲しい。．．．．  
．．．それと、その少年。君も彼らの同伴者か？もしそうなら君も  
逮捕する。」

「はい？」

「ま、待ってください！」

当麻は突然逮捕すると言われ、思わず奇怪な声を出し、ジュードは  
エデに呼び止める。

「た、確かに、迷惑かけるようなことはしたけど、それだけで重罪  
だなんて．．．．！それに彼は何もしてません。さっき偶然そ  
こに居合わせただけで。」

ジュードは迷惑はかけたが重罪になるような事はしてないと主張。  
さらに当麻を何もしてないと庇いなら反論する。

「ジュード．．．．」

当麻はジュードを見て嘆く。

しかし兵士達は問答無用とばかり武器構えだした。

「問答無用ということのようだ」

「エデさん．．．！」

ミラが言い、ジュードは名前を呼び、叫ぶ。

「悪いが。それが俺の仕事だ。」



「どうやら、もう何をいっても、聞かねえみたいだな。」

当麻はもう無駄だと悟り、二人に向かって言う。

「ジュードとその少年。私は捕まるわけにはいかない。」

ミラはジュードと当麻に素晴らしい、剣を抜く。

「すまないが抵抗するぞ」「……………抵抗意思を確認。応戦しろ！」

エデは相手が抵抗すると判断し、兵士達に命令させる。

すると一人の兵士が詠唱を唱え、ファイアボールを飛ばす。  
三人はギリギリで避け、ファイアボールは建物に激突した。  
ミラはふと後ろを振り向く、すると船がすでに動きだしていた。するとミラは

「さらばだ、ジュード。本当に迷惑かけた」

するとミラはジュード達にお別れを告げ、船の方へと走り去る。

「な！？おい、ちょっとまって！！てめえ！！」

突然別れを告げ、勝手に逃げだした為、当麻は驚きながらもミラを呼び止めるが、聞こえていないのか足を止まることはなかった。

「さあ、先生。」

抵抗したら、その分罪は重くなりますよ。」

エデはジュードに脅しを掛け、ジリジリと近づいてくる。

「僕は……………僕はただ……………」

「（このまま俺が逃げ出したら、ジュードは間違いなく捕まってしまう、かといって俺が出て相手は4人。．．．．．クソォ！！一体どうすれば．．．．．）」

当麻は悔しかった。自分は何もできないことが、このまま黙って見ているのが本当に悔しかった。

自分にもっと力が、守れる力があればと。当麻は苦虫を噛みながら、目を瞑りながら嘆く。

とその時

バキッ

「グフオ!!!!!!!!!!!!!!」

横から知らない青年が出てきて、エデを殴り飛ばした。そして残りの兵士を軽々と蹴散らした。そして。

「軍はお堅いねえ。女と子ども相手に大人げないったら。」

「あ、あなたは．．．．．?」

「あんたは一体?．．．．．」

青年の外見は、茶髪気味の黒髪オールバック。瞳の色は髪と同色で、タレ目。どこかの貴族のようなもっさりした格好で、長いスカーフを巻いていた。

ジュードと当麻は突然の出現により、戸惑いながらも青年に問いか

けた。

「おっと。話はあとな。連れの美人が行っちゃもうよ？」

「でも僕は．．．．．！」

「軍に逮捕状が出て、特法まで適用されてるってことは、だ 君は  
Sランク犯罪扱い。捕まったら待ってるのは．．．．．  
極形だな。」

「な？」

「そんな！」

謎の青年の爆弾発言により、当麻とジュードは驚愕する。  
するとその時。

「見つけたぞっ！！」 「までーっ！！」

「捕まえろーっ！！」 「逃がすなー！！追えっー！！」

増援により、大量のラシュガル兵達が追って来た。

「走るぞっ！！」

当麻が叫び、3人とも同時に走り出す。

タッタッタッタッタッタッタッタ．．．．．

・・・・

当麻達は船のもとへ全力で走り出す。  
すると謎の青年が

当麻とジュードを持ち上げ、担ぐ。

「よっと」

「ちょ!?!」

「わ!」

当麻とジュードはいきなり持ち上げられたため、思わず声を出して  
しまう。

すると謎の青年は2人を抱えたまま、船の上に飛び乗ろうとする。  
正直当麻達と船との距離はかなり離れていて、普通のジャンプでは  
絶対に届かないが、謎の青年は2人を抱えながらも、その跳躍力を  
生かし、一気に船のどこまで飛ぶ。しかし、着地地点が空の箱の上  
だったようだ。

ドン!! ガシャン!!

思いつきり激突した。

「イッテェー!!」

「うー・・・」

当麻とジュードは頭を押さえている。

「ちょ、ちょっと、あんたたち!?!」

船員の1人が当麻とジュードと謎の青年を見ながら言う。

「まったく参ったよ。なんか重罪人を軍が追っているようでさ。」

そういうながら謎の青年は立ち上がる。

「おいおい。こんなイイ男と女、不幸そうな男、こどもが重罪人に見える？」

そういうながらミラを見ながらウィンクをする。

それを不思議がって見るミラ。

それを涙目で睨みつけてくる当麻。

「あの………」

「て、テメえー、今なんて………」（プルプルッ）

「アルヴィンだ！」

「「え？」」

「名前だよ。君はジュードだったかな？」

アルヴィンは自分の自己紹介とジュードの名前を言う。

「う、うん。こっちは当麻とミラ」

ミラは当麻とジュード、アルヴィンに近づく。

アルヴィンは落ち込んでいりジュードの肩に手を置いた。

「がんばったな」

そう、アルヴィンがジュードに言うが、ジュードは無反応のまま、ずっと落ち込んでいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ、なんかオレ、とんでもない不幸に巻き込まれてしまったようだ・・・・・・・・」

「不幸だ・・・・・・・・」

当麻はそう小さく、嘆いた。

上条当麻の不幸は、これから始まるのであった。

### 第3話 幻想殺し〜新たなる旅立ち〜（後書き）

ついに物語が始まりました。

まだ3話しか投稿してないのに、早くもグロッキーです（T|T）  
それでもがんばって投稿できるように努力します。

## 第4話 イラスト海停（前書き）

第4話 投稿です

グダグダですが、どうぞ。



## 第4話 イラート海停

「船長のやつ、勘弁しろよな。いつまで尋問するつもりだったんだよ。」

「致し方ない。身分を示すものがないのだからな。」

「おたくが、だろ」

あれから船は進み、その間、アルヴィンとミラは船長に尋問され続け、ようやく解放された。

ちなみにジュードと当麻は学生証を持っていた為、尋問されず、なんとか見逃してくれた。当麻の場合は当麻の学生証を見た時、船長は当麻を少し疑っていたが、なんとか見逃してくれた。

アルヴィン達は歩きながらジュード達のところへ向かった。

「アジュール行きだなんて……………外国だよ……………」

ジュードは静かにそう呟く。

「ジュード……………」

当麻達は今甲板に居る。

当麻はジュードを見て、心配し、小さく名前を呼ぶ。それもその筈、

ジュードはさっきまで医学生として生活してたのに、ただハウス教授を探しに出掛けただけなのに、急に事件に巻き込まれ、挙句、犯罪者扱いされてしまい。将来の希望が潰えてしまったのだから。当麻はジュードになんて声を掛ければいいかわからず、黙ってしまふ。

するとアルヴィン達は当麻達のもとへ近づく。

「見ろよ。イル・ファンの霊勢が終わるぞ。」

アルヴィンがそう言うと共に空の景色や周りの暗い景色が、明るく、見えるようになった。

「にしても、二人とも学生だったとはね。ちょっと驚いたよ」

ジュードがまさか、医学生とは思っていなかったアルヴィンは純粋に驚いていた。そして当麻には

「にしてもジュードくんはともかく、当麻くんは。イル・ファンの生徒ではないようだな。学園都市なんて聞いたこともないんだが……」

「うん、僕も聞いたことはないけど……」

アルヴィンとジュードは聞いたことないといい、2人……いや、3人は当麻のほうへ向く。

「い、いやさ、実は俺、ここから遙か遠くから来たんだよ。ちょっと訳ありで旅にでてさ、旅にでたのはいいんだけど、途中で道を迷っててさ、気がついたら街中で倒れてたんだ。」

当麻は慌てながらも、曖昧な説明で、なんとか誤魔化する。

「(う、嘘は言ってないはず・・・ウソは・・・)」

当麻は罪悪感を感じながらも、これでいいと思った。正直本当の事を言おうかと思ったのだが、まだ出会って間もない人達に自分は異世界に来た、なんて口に出せなかった。

「そうだったんだ。」

ジュードはそう納得し。

「ふーん・・・」

アルヴィンは納得な表情はしてないが、素っ気ない返事をする。

とにかくなんとか、誤魔化すことが出来たようだ。

するとジュードはアルヴィンに。

「ねえ、聞いて、いい？」

「いいぜ、何でも聞きな。」

「どうして助けてくれたの？あの状況じゃ、普通助けないよ。」

ジュードは何で助けてくれたのか疑問に、聞いた。するとアルヴィンは

「金になるから」

「え？」

「はい？」

ジュードと当麻は、まさか予想外な事を言われた為、思わず声を出してしまう。

アルヴィンがそう言うミラは腕を組み。

「私たちを助けることが、なぜそうなるのだ？」

「あんたらみたいなのが軍に追われてるってことは、相当やばい境遇だ」

「そいつを助けたとなりゃ、金をせびれるだろ？」

「でも、僕、お金ほとんどもってないよ。」

「上条さんも持っていないのですが」

「生憎、私もだ。」

3人はお金を持っていないと主張する。

オマケに当麻は異世界人であるため、例え金を持っていたとしても、使いものにならないが。

「まじか……。それじゃ、値打ちもんがあれば、そいつでも受け付けるぜ？」

とアルヴィンは二度目のウィンクをする。

「ないよ。あんな状況だったんだ。」

「同じく。」

あんな状況だったため、ジュードと当麻は無いと言う。

「高く取り引きされそうなものなどないだろうな。」

とミラは言う。

「ねえ、アルヴィンって何してる人？」

軍人みたいだけど……ちょっと違う感じだしさ。」

ジュードがアルヴィンにそう聞き、訪ねる。

「へえ、いい線いってるよ。傭兵だ。」

「金は頂くが、人助けをするすばらしい仕事。」

「ふむ。それは感心なことだ。」

「はあ、しゃあないか。ア・ジュールで仕事でも探すか」

「そうするしか、ないようだな。」

アルヴィンは仕方ないとばかりにそう言い、当麻はそれしかないと同意する。

「すまなかったな」

ミラは軽く謝罪し、アルヴィンは軽く手を振り、

「ボランティアか……早くア・ジュールに着かないかね。」  
ボソリと呟いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こうして、話は終わり、船がア・ジュールのイラート海停に着くのを待つのであった。

「イラート海停」

それから時間が立ち、ようやくイラート海停に到着した。

「ここが、イラツと海停かあ。」

「イラート海停な。それじゃ海停の人達はイライラしてる人に見えるじゃねえか。」

当麻が間違え、アルヴィンが斬新にツツコむ。

「ぐっ／＼・・・・・・・・それより外国つつつても、さっきのイル・ファンの海停とたいして変わんないな。」

「ああ、ア・ジュールっていつでもここら辺はな」

「・・・・・・・・あ、当麻、あそこに地図があるみたい。見てくるね。」

「ああ、俺も行くよ。ジュード。」

ジュードと当麻は地図のある場所まで、走っていった。

「空元気、かねえ」

「気持ちを切り替えたのか。見た目ほど幼くないのだな。」

ミラがそういうと、アルヴィンは呆れたように、腕を組みながら言った。

「おたくが巻き込んだんだろ？随分と他人事だな。」

「確かに世話になった。だが、あれは本人の意思だぞ？。」

「じゃああの少年は？」アルヴィンは当麻のほうに指を差す。

「あの少年は知らん。いつの間にか勝手について来た。」

「ふーん。にしてあの少年は別に空気ってわけじゃないなあ。不幸そうな面はしてるが、別に無理してるようには見えない。」

「そうだな。まるでこの状況に慣れてるように見えるが。」

「確かに、で、話は元に戻すが、要するにあの二人は本人の意思でついてきたってことだよな？」

「ああ、そうゆうことになる。私は再三帰れと言ったのに。」

それを聞き、何かに気付いたアルヴィンがミラを見ながら言った。

「はーん、それでおたくらに当たるわけにもいかないから、空気ってか。」

それを聞きながら、ミラはジュードと当麻のいる地図の所に向かう。

「どっちにしてもオトナなこと。」

そしてアルヴィンは遅れてミラ達の所に行く。

「ここから北か．．．．．」ミラは地図を見ながら呟く。

「ふーん。それで？すぐ発つのか？」

アルヴィンがミラに聞く。

「いや．．．．．」

「アルヴィン、傭兵というからには戦いに自信はあるのだろうか？」

「ああ。そりゃあな」

アルヴィンはミラの問いに自信満々に肯定する。

「私に剣の手ほどきをしてもらえないか？」

「「！！」」

ミラはアルヴィンにそう言い、ジュードと当麻はピクリと反応する。

「今の私は、四大の力を持たない。剣を扱えないと、この先の道は困難だ？」



「「四大……？」」

ミラの違和感のある、言葉に、当麻とアルヴィンは首を傾ける。

「なんか、よくわかんねえけどさ。正直、俺を雇って欲しいところだよ。でも金ないんじゃないかな……」

「…………無理だろうか？」

「稼ぎながら、訓練するのはどうよ？」

と、アルヴィンが提案を出す。

「どういうこと？」 ジュードが聞き返す。するとアルヴィンは

「そうだな……この海停にもいるだろ。探してみようぜ。」

するとアルヴィンは足を進める。ジュード達は首傾けながらもアルヴィンに着いていく。」

少ししてアルヴィンは女性に声をかけた

「よ。依頼があるんだろ？俺たちにやらせてくれないか？」

「あら、あなた傭兵？丁度良かった。」

「「依頼？」」当麻とジュードは声を揃えて口にだした。

「そ。こういう依頼は魔物との戦いになるときもある。」と、アルヴィンが説明するが、すると当麻が……

「マモノ!？」

すると三人は一斉に当麻をみる。

「ど、どうしたの？当麻。急に大声出して。」

「い、いや、何でもない。」（。▽。）

「・・・そうか、ここで仕事として依頼をこなせば、お前は報酬を、私は訓練になるというわけか。」

「そゆこと。これで利害が一致したろ？」

ミラはアルヴィンの考えてることを理解して、答えた。

「じゃあ、詳しく聞いてみるか。」

そして、アルヴィン達は女性の依頼の内容を聞いた。

その内容はイラート間道・西方の南西にいる魔物退治であった。

「いいだろう。魔物退治とは好都合だ」  
するとミラは嬉しそうに言う。

「どうかお願いします。手強い魔物なのでお気をつけて」

「そうそう、剣の手ほどきについてだがさすがにこのままじゃしんどいだろう」

ミラは首を下に傾く。

「基本だけな」

「よろしく頼むよ。」

とミラは一言いって、ミラ達は人目に着かない所に行き、稽古を始めた。

当麻とジュードは二人の光景を黙って見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さあ構えてくれ」

「ああ」

ミラは剣をとり、構えた、そして稽古を始めた。

〽数分後〽

「ま、こんなもんだろう。」

アルヴィンはこれで終わりと喋る。

「すまなかったな」

ミラは剣をしまい、軽く謝罪し、お礼をいう。するとジュードたちはミラに近づき、

「じゃあ、行こっか」

「待て！、ジュード。君は、これからどうするつもりなんだ？ それとお前も。」

するとミラはジュードと当麻を呼び止め、これからどうするか聞いてくる。

「もう私についてこなくてもいいのだぞ？」

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・」

「なあ、そのことなんだけどさ、もう少し考える時間をくれないか？」

当麻はミラにもう少し時間をくれないか頼む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ごめん。ミラが出発するまでには決めるから。」

ジュードも当麻と同じ意見のようで、同じく頼みこむ。

「そうか、わかった」

ミラは了承してくれた。

「では、とりあえず依頼をこなすでしょう。」

ミラは早速と言わんばかりにさっそうと足を進める。

「軽いお節介のつもりがいつしか、重罪人扱いか・・・・・・・・おたくらぐらいの年の子にはちっとしんどいよな。」

アルヴィンはジュードと当麻に話す。

「…………でも、僕が勝手にやったことだから。」

そしてジュードはミラの所に走って行く。

「まあ俺はこういった厄介事は慣れてるからな。」

「へえ、おたく、こうゆう経験が豊富なの？」

「上条さんもいろいろあったんですよ…………いろいろ、ね」

当麻は遠い空を見つめ、深いため息をした。余程辛い目にあったんだなあ、とアルヴィンは思った。

そして当麻とアルヴィンもミラ達の元へ向かった。そして当麻達は魔物退治へと向かうのであった。

ーチャットー

『当麻とジュード』

ジュード「当麻！」

当麻「ん？どうした。」

ジュー「ごめん、僕のせいで君を巻き込んでしまつて。」

当「ああ、別にお前のせいじゃねーよ、あれは勝手に俺がツッコんだんだし。別に気にしてねえて。」

ジ「でも重罪人扱いまでされてしまったんだよ！？当麻は悪いことしてないのに」

当「それでもお前のせいじゃない」

ジ「え？」

当「俺さ、目の前の人困っていたら、助けを呼ばれたら俺は迷わず助けにいくぞ？」

ジ「！？」

当「例え厄介事が起きたり、犯罪扱いされようが、それでも助ける。もしそれを関わらず、それが取り返しの着かないことになったら。俺は一生後悔する。」

ジ「当麻……」

当「お前だってあのミラって人が困ってたから助けたんだろ？ほっとけなかったんだろ？」

ジ「そ、それは」

当「それでいいじゃないか」

ジ「え？」

当「もし関わらなかったら、もしかしたらミラがここにいなかったかも知れない。」

ジ「……………」

当「けど助けたから。今ココに居る。それでいいじゃねえか。ウジウジしたってしょうがねえだろ？」

ジ「当麻……うん。そうだね」

当「ああ。まあ確かに俺達重罪人になったけどさ、それでも何とかなるさ。別に俺ら一人じゃないし。」

ジ「うん。そうだね。この先、なんとかなるよね」

当「ああ、例えこの先困難であっても、それでも突き進もうぜ！」

ジ「うん。やろう、当麻。僕たちチカラを合わせて。」

当「ああ。もちろんだ!!」



## 第5話 魔物退治と共鳴戦闘（前書き）

第5話 投稿です！

どうぞ。

## 第5話 魔物退治と共鳴戦闘

「あ、あれがマモノ？」

イラスト海停から少し歩くと数体の魔物がいた。当麻は始めて、魔物を見るので、声を出して言う。

「そうだけど、もしかして当麻は始めて見るの？」

「ああ、まあな。俺のそこ（世界）には居なかったからな。それよりアレはどうするんだ？」

「邪魔だから倒すに決まっておるだろ？可笑しなことを聞くのだな。」

そういつてミラとアルヴィンは武器を取り出し、構える。戦闘をしようとする。・・・

「む、リリアルオーブが光った？」

ミラに続いてジュード、アルヴィン、当麻のリリアルオーブが光りだした。

「3人ともリリアルオーブを持ってたのか？・・・」

んじゃ、共鳴<sup>リンク</sup>戦闘、いってみるか」

「共鳴<sup>リンク</sup>………？」

「な、何だそれ？」

ジュードと当麻はアルヴィンに聞く

「リアルオーブには、仲間の意識を感知する力がある。」

「これを利用すれば、意識を共有した連携攻撃………共鳴<sup>リンク</sup>を発動できるんだ」

アルヴィンはリアルオーブについて、詳しく説明する。

「ふむ、しかしどうすれば？」

「やってみりゃわかるよ。リアルオーブに意識をしろ！」

4人はリアルオーブに意識を集中すると再び、リアルオーブが光り始めた。

そして戦闘が始まった。

少しして、アルヴィンが言った。

「よし、まずは手本をみせる。ミラ、逝くぞ。」

「字がちがうような気がするが、了解した！」

ミラがファイアボールの精霊術を発動させると共鳴<sup>リンク</sup>アーツが発動した。

「これでトドメだ！燃えろ」「紅蓮剣」

ミラが放った炎の力を受けて、アルヴィンが斬り上げながら飛んだ後、斬り下ろしつつ炎の闘気を飛ばした。

『ギャオオオオオン！』

その共鳴<sup>リンク</sup>アーツによって、残っていた魔物達を殲滅した。

「友情・協力・勝利！人間らしい戦法だろ？」

「うむ、気に入った」

「スゲーな！連携できるなんて」

「うん。1人じゃないって嬉しいね」

「お、いいこと言うねジュード君」

そういいながら、ジュードの肩に腕を回すアルヴィン。ジュードは嬉しそうな表情をする。

そしてそのまま、当麻達は奥に進んでいった。

「それにしてもこれがリリアルオーブかあ」

当麻はふとりリアルオーブを見た。

「これのせいで、俺はこの世界に来てしまったんだよな。」

「どうしたの？当麻。」

「いや、リリアルオーブにこんな凄い機能があったなんてな」

「確かに、そうだね。僕も初めて知ったよ。僕たち上手く使いなこなせるかな？」

「確かに、難しいそうだよな。」

「でも、やってみようよ、当麻。この先何があるか、分からないし。」

「それもそうだな。いつちよやってみますか。」

「うん」

当麻とジュードはそういい、当麻達はそのまま奥へ進む。

イラート海停からイラート間道・西方の南西の奥まで来ると、この

辺りにはいないはずの魔物達が居た。

「見て！きつとあいつが依頼でいった魔物だよ」

「確かに、この辺りに出没する魔物ではないようだ」

「よし、さくつとやっちゃまおう」

そして、戦闘が始まった。

「よし、ジュード、俺達もやろうぜ。」

「うん。わかった」

「魔神拳！」

最初はまずジュードが敵<sup>クラブマン</sup>  
に技を放つ。すると共鳴<sup>リンク</sup>が発動した。

「いくよ当麻」

「ああ」

「魔神連牙斬」

二人同時の衝撃波を発生させ、魔物達を倒した。

そして、続けて

「行くよ、ミラ」

「了解した」

「エアリアルファイア」

ジュードの巻空旋で空中に投げ飛ばされた敵を、ウオントフレアボムで素早く追撃し、魔物を倒した。

勝利の掛け声

「やったね、当麻」

「あ、ああ、まさかこう上手いくとは」

拳と拳を合わせて、そういったジュードと当麻。

「へえ、二人共、筋がいいねえ」



「ああ。二人共、なかなかのコンビネーションだったぞ」

「大丈夫、ミラ？」

「ああ。実践が一番の訓練だな」

「んじゃ、イラート海停にもどって報告しようぜ」

「そうだな。早く魔物を退治したことを教えないとな」

そういう当麻達は、イラート海停に戻っていったのであった。

イラート海停に戻ってきた当麻達は早速、依頼達成のことを依頼主に報告した。

「依頼された魔物退治、確かに果たしたぜ。」

「ありがとうございます。おかげで助かりました。」

「と、まあこんな具合にやるんだ。困ってるヤツはどこにでもいるから、結構稼げるぜ」

「さすがアルヴィン。慣れてるね。」

「ホントだよなあ、アルヴィンはいつもこういった依頼を受けてたのか？」

「まあな。結構稼げるんだぜ、これが。」

そういい、依頼を終えたアルヴィン達は一旦、休む為にイラート海停の宿屋に向かおうとしたその時クラッ

ミラの体が倒れそうになった

「あぶねえ！！！」  
ガシッ

間一髪当麻がミラの手を掴み、なんとか受けとめた。

「おい、お前大丈夫か？急に倒れそうになったからさ」

「・・・・・・・・力がはいらない」

そんな時

グウウウウ・・・・・・・・

「・・・・・・・・はい？」

ミラのお腹の虫がなった。

それを聞いたジュードはじいっとミラを見る。

「ねえ・・・・・・・・」

ちゃんとご飯食べてる？」

飯を食べているかを聞くジュードにミラは答える。

「・・・・・・・・食べたことはない」

「え？今なんて？」

その返答に驚き、もう一度聞き返す当麻。

「だから・・・・・・・・ご飯は・・・・・・・・一度も、食べたことは・・・・ない。」

「・・・・・・・・一度も？」

「シルフの力で大気の生命子を・・・・・・・・ウンディーネの力で水の生命子を・・・・・・・・」

「あ、あの、ミラさん？一体何のことをいってるのでせうか？」

ミラの言うことの意味がさっぱりわからない当麻は焦りながらミラに聞き返す。

「栄養を精霊の力で得ていたってこと。これからは、ちゃんとご飯食べなきゃね。」

ジュードはミラにそういうと、ミラは顔を上げていった。

「そうか．．．．．これが空腹というものか。」

「ふふ。興味深い。」

ミラは興味深そうにに笑い、そう言った。

「じゃあ、今日は宿屋で休むか。そういえば俺も腹へったよ」

「そうしますか。」

アルヴィンが宿屋へ休むと言って、当麻は同意し、そして当麻はミラの方へ向き

「それじゃ．．．．．よっこらせつと。」

「!？」

「当麻．．」

「へえ」

おんぶした。

ミラは当麻におんぶされたことに少々驚き、ジュードは軽く名前を呼び、

アルヴィンはニヤニヤしながら嘆いた。

「う、うむ、すまない、迷惑をかける」

「別にいいって、このくらい御安いご用さ。」

「へえ（ニヤニヤ）当麻くん。意外とやるねえ。」

「・・・何ニヤニヤしてんだよ。言っとくけど、上条さんは紳士ですぞ?」

「紳士、ねえ」

「／／／（と、とはいったものの／／／せ、背中になにかが当たってるのですが／／／い、いかん！冷静になれ！上条当麻。平常心だ、平常心・・・）」

「ん?どうした?当麻。何やら顔が赤いぞ?」

「い、いや、気のせいじゃないですか?・・・それよりもさ

っさと宿屋へ行こうぜ」

「・・・ ああ、そうだな」

当麻は誤魔化しながらせつせと、宿屋へ向かった。

「フ、フ、フ、アイツ、意外とウブなんだなあ」

「・・・・・・・・ アルヴィン・・・・・・・・」

こうして当麻達は宿屋に向かい。長い1日が終わった。

ーチャットー

『魔物退治の途中で』

当「なあ。ジュード、頼みがあんだけどさ」

ジュ「どうしたの？当麻」

当麻「俺にも武術を教えてもらっていいか？」

ジュ「え？」

当「俺さ、ミラ達の戦いを見て、ふと思ったんだけどさ、今の俺が、ミラ達についていっても、恐らく足を引っ張ってしまう。」

ジュ「………当麻」

当「だからさ、もし迷惑じゃなかったら俺にも教えてもらえないか？」

ジュ「………うん、僕でよかったら。」

当「ありがとな、ジュード」

ジュ「ううん、………それじゃコレ。」

当「これは？………手甲？」

ジュ「見たところ、当麻も僕と同じ素手で戦うじゃない？。だから



当麻には僕と同じ武器でいいかなと思って。」

ジュ「それに、同じスタイルだったら、いろいろ教えることができるしね。」

当「……………ありがとな。助かるよ。」

## 第5話 魔物退治と共鳴戦闘（後書き）

今回魔物退治と共鳴<sup>リンク</sup>についてでした。

上条さんの戦闘スタイルは基本ジュードと同じです。

今回出した魔神連牙斬についてですが、魔神拳の衝撃波って、多分異能じゃないと思い、上条さんに覚えさせました。

リアルオーブとかは異能かも知れませんが、そこは大目にみてくれると助かります。

これから上条さんに技術、共鳴技術を覚えさせたいと思います。もちろん異能を使わない技でいきたいと思います。オリ技とかも出せたら出そうと思います。

それではっ

## 第6話く果樹園の村 ハ・ミルく(前書き)

第6話投稿です

勿論グダグダですが

今回は多めです。

## 第6話 果樹園の村 ハ・ミル

イラート海停 宿屋 ロビー

「いらっしゃい」

「4人だ、とりあえずすぐに食事だけもらっていいかい？」

「すまないね。料理人がまだ来てないんだよ。」

アルヴィンは宿の人に食事を要求するが、宿の人は料理人がまだ来ていないと言う。すると

「ちよっ!?! ミラ? 大丈夫か?」

「.....」

宿の人の言葉で、ミラはショックで倒れそうになり、当麻が慌ててミラを支える。

「だったら厨房使わせてもらっていいですか？」

するとジュードは宿の人に厨房を使わせてもらっていいかと要求する。恐らくこのまま待っても、大分時間がかかってしまうだろう。

「お連れさん、ぶっ倒れそうだしな。好きにしてもらっていいよ」

「腹と背中がくつつく．．．．．ふふふ。そんなことは不可能だが」

「なるほど、体験すると、この言葉がよい表現だと感じる。ふふふ」

ぐうう．．．

「お、俺も厨房に行ってくるわ。はやく作らないと、ミラがどんどん壊れていくしな（汗）」

「当麻はこれ以上ミラが壊れていくのがイヤだったのか。ミラを近くにあった椅子に座らせ、急いで厨房に向かった。

（数分後）

料理ができた当麻とジュードは、ミラとアルヴィンの居る、テーブルまで料理を運んで、食べはじめた。

「お、美味しい」

「それだ」

ガツガツ食べていたミラは、アルヴィンの「美味しい」の言葉に反応し、自分が思っていたことがそれだと言った。

「食事というのは、なかなか楽しい。人はもっとこういうものを大切にすればよいのだ。」

ミラは嬉しそうに話をする。そんなミラを見て、当麻とジュードは下を向き、何かを考える。

「（食事はなかなか楽しい。か、なんかミラを見てると、インデックスを思い出すな。）」

当麻はおいしそうに食べるミラを見て、脳裏にインデックスを思い浮かべる。

かつてインデックスも、彼女の数倍以上、幸せそうにご飯を食べて

いた。しかしそれはその幸せは予想以上に遥かに越えていて。あらゆる物を食べ尽くす、食費破滅機へとグレードアップしてしまった。料理中につまみ食いしたり。冷蔵庫の中は空っぽになったり、おかげで当麻はいつもカップラーメン。当然、火の車である。それを思い出した当麻は食事中、手が止まり、苦い顔を浮かべていた。

食べ終わると、ミラはテーブルで寝てしまった。そんなミラを見て、ジュードが口を開いた。

「もしかすると、寝るのも初めてなのかな」

「・・・・・・・・さっきの飯食べてなかったってのもそうだが・・・・・・・・何者？この娘」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

するとアルヴィンはふと疑問に思っていたことをジュードに訪ねる。当麻はアルヴィンの言葉を聞いたまま黙ったまま耳を傾ける。

「マクスウエルなんだって。アルヴィン、知ってる？」

「・・・・・・・・マクスウエルだって？」

「うん。僕なんか、実体化した精霊をちゃんと見たのも初めて」

「精霊の主、四元素の使い手、最古の精霊、色々な呼び名があるが、  
.....」

「この娘が、精霊マクスウェル？嘘だろ.....」

「.....なんだよ、そんなに凄い精霊なのか？」

当麻は驚いているアルヴェインに聞く。

「ああ。信じられないよ」

「ガキの頃から枕許で、マクスウェルの話を聞いて育ったんだからな。」

「子供の頃って、マクスウェルってそんなに有名なのか？」

「ああ、俺の国じゃ、マクスウェルを知らない奴なんて、いないさ。  
」

「そのマクスウェルが.....ミラなのか？」

「.....」



「そんなミラが壊そうとしてるものって何なんだろう．．．．．」  
「？」

「壊そうとしてる？何を？」

ジュードの言葉にアルヴィンが訪ねる。

「あ、うん。確か黒匣<sup>ジン</sup>とか言ってたかな」

「研究所にあった装置」

「研究所って、もしかして、えーと、ラフォート研究所か？」

当麻が研究所の名前をいい、ジュードは肯定する。

「うん、その時、ハウス先生を探しに行ったんだけど」

そしてジュードは今わかっていることを当麻とアルヴィンに説明した。

ミラとの出会い

## ハウス先生の死

### 古代クルスニクの槍

「そんな。ハウスさんが……………」

当麻は何よりも驚いたのはハウスの死だった。会ったことはないが。立派な研究者だったとプランから聞いている。

「クルスニクの槍か……………」

アルヴィンはその名前を小さく嘆く。

「だから詳しくは知らないんだ……………ミラに聞いてみようかな……………」

するとアルヴァイが

「興味本位で首つつこんだせいでこっでも追われる身になったりしてな」

「……………」

「ま、しっかり考えるんだな」

「・・・・・・・・ん。ありがとう、アルヴィン」

こうして今日1日の夜が終わるのであった。

（翌日）

「おはよう。みんな。」

ジュードが皆に挨拶をした。

「おはよう。早速だが二人共、これからのことで話がある」  
「ああ」

「・・・・・・・・ん」

「私はニ・アケリアに帰ろうと思っている。」

「ニ・アケリア？ミラの住んでるところ？」

「正確には配られている」

「.....」

ジュードと当麻はミラのいったことが分からなかったのか、少し首を傾げる。

「そこに帰れば、四大を再召喚できるかもしれん」

「四大って、四大精霊か。」

当麻はジュードから少し聞いたため。  
その名前を口にする。

「マジでマクスウェルなのか.....」

アルヴィンはマクスウェルの名を誰にも聞こえないように、小さく  
呟く。

「そこでだ、二人共。私と一緒にニ・アケリアに行かないか？」

「「え？」」

「今の君たちの状況は身から出た錆というものだが、私の責任であるのも、また事実。ニ・アケリアの者たちに私が口添えしよう。き

つと君たちの面倒をみてくれるはずだ」

ミラがジュード達のことを考えて、話していると

「へえ。意外と考えてやってるのな」

アルヴィンは意外なものを見るようにミラを見る。

アルヴィンに言われてアルヴィンを見ながらミラが話す。

「うむ。お前に、まるで他人事だと言われて、少し反省してみた」

ミラがそう言うのと、ジュードが聞いて、来た。

「ねえ、剣の練習はもういいの？」

「うむ。安心しろ。一応、振り回すぐらいはできるようになってるな。」

「それをいったら当麻だって、腕もなかなか様になっているぜ」

「うん、初めて戦った（魔物）ときも、とても素人に見えなかった

よ」

「ああ。意外に度胸もすわっているようだな」

急に当麻の話題になり、アルヴィン、ジュード、ミラは当麻の身体に意外だったのか当麻を褒める。

「い、いやー、上条さんはそんなたいしたことはしてないですよ？」

「にしちゃ、結構戦い慣れしてるようにみえたが。何かしてたんだろ？」

とアルヴィンが当麻に言う

「何かっていわれてもな。．．．ただ俺は 不良に追いかけられたり、ビリビリに追っかけられたり、変な奴らに（主に魔術師）に襲われるわ、何故かしらないがクラスの連中からボコボコ（男子の嫉妬）にされてる不幸な青春を送っただけど？」

「．．．．．」

ジュードとアルヴィンは当麻の不幸で、最早何も言わなかった。するとミラは

「そうか．．．．．。つらい過去を思い出させてしまったな。」

「いえいえ。上条さんはこんな不幸はなれてますから」

「安心しろ。私達は決してお前をイジメたりはしない。だから何が

あっても強く生きろ！」

「え？ いや、一体なん「わかったな！！」・・・・・・・・・・は、はい。」

どうやら不幸の話をしたただけなのにどうやらミラは不幸Ⅱイジメと思ったようだ。実際当麻は子供の頃に深いイジメがあったのだが、生憎記憶喪失（破壊）のため、イジメに関しては余り知らない。

「当麻。ここは諦めるしかないよ。僕もそういう事にされてるから」

「ジュード・・・・・・・・お前も苦勞してるんだな・・・・・・・・」

こうして話が終わり、静かに宿屋に出たのであった。

準備が終わり、今当麻たちは入り口にいる。

「んじゃ行くとするか。」

「ミラ、確か、ここから北っていったよね？」

「どれくらいかかるんだ？」

「シルフの力で飛んだのなら半日もかからない距離だろう」

「あの・・・ミラさん？、できれば人間の基準として教えてくれませんか？」

「わからない」

「即答ですか」

ミラがわからないといい、当麻は軽くツツコム。

「途中に休めるところが、あるといいんだけど」

「地図だと村があるみたいだったし、大丈夫じゃないかな」

アルヴィンが休める場所があるか心配し、ジュードが途中で村があるので大丈夫と促す。

「いずれにせよ、ここにいっても始まらない。行くしかないだろう。」

「はいはい」



こうして当麻たちは地図を頼りに進み、ニ・アケリアに向かうのであった。

〽数十分後〽

あれから当麻達は現れる魔物達を倒しながら次の目的地に進んでいく。

歩いている途中、ミラは足が止まり、動きを止める。

「ふう………歩くというのは、なかなか大変だな。足が太くなってしまうそうだよ。」

額に汗をかき、膝に足を置いて、ミラが言う。

「ミラって案外お嬢様なんだ」

「お嬢様などではないが、ずっとシルフの力で空を飛んでいたのだから。歩くのは、ウンディーネと、水上を散歩する時くらいだった。」

「・・・・・・・・それは、お嬢様には無理だね」

「四大精霊をコキ使って、バチ当たっても知らねーぞ。」

「なに、少々力はあるが、口うるさい小姑のような奴らだよ」

急にミラが怒ったような顔になり。

「時に私を子ども扱いしたりもする。まったく困ったものだよ」

「四大精霊を・・・・・・・・」

「小姑呼ばわりかよ」

「てか、ホントに四大精霊って凄いなだね。」

すると横から当麻が口に出す。するとジュードが

「当麻ってホントに何も知らないんだね。さっきも魔物のこともそうだし。」

「え？あ、ああ、俺のそこは魔物なんか存在しないんだ。」

「ええ！？そうなの？」

「へえ」

ジュードとアルヴィンは当麻の発言で驚く。

「それは凄いな。一度、当麻の街に行ってみたいものだ。」

「あ、ああ。今はこんな状況だしさ、ほとぼりが覚めたら、案内するよ」

ミラは当麻の街に興味をもち、当麻は慌てながらも事件が解決したら、案内する　と言い。この話を終わらす為に当麻は早歩きで歩きはじめた。

「（勢いのあまりついってしまった．．．．．その前に俺は元の世界に帰れるだろうか？）」

当麻はその前に自分の世界に帰れない。　帰れる方法を見つからないと、ミラ達を自分の街を案内することはおろか。この世界に暮らすことになってしまう。勿論ミラ達を自分の街を案内すると言うことは自分はこの世界の人間じゃないことを　表すことになる。当麻はいつか皆に本当の事を言うつもりであった。もし皆を学園都市を見せたら、100%腰を抜かすだろう。

（数時間後）

「果物がいっぱいだ。甘い匂いがするね。」

「酒の匂いもな。果樹園でもやってるんじゃないか」

「見たことのない果物がたくさんあるな。」

辺りを見渡し、ジュード、アルヴィン、当麻はこの街に来た感想を言う。

「おやまあ、こんな村にお客さんとは珍しい。」

一人の老婆が近づいて来た。

「おばあさん、村の人？」

「村長をやつとります」

「ニ・アケリアへ行くにはこの道であっているか？」

村長が自己紹介して、ミラが行き先を聞く。

「ニ・アケリアとはまたずいぶんと懐かしい名を」

懐かしがる村長にアルヴィンは聞いた。

「どういう意味？」

「忘れられた村の名じゃ。今ではあるかどうかもわからん。子どもの頃にキジル海爆の先にあると聞きましたか……」

「キジル海爆？」

「大きな滝ですじゃ」

ジュードが聞き、村長が説明する。

「ニ・アケリアをお探しなら、起伏の激しい岩場を通り抜けるのお。」

「

「そりゃあ、ちょっとここで休んでから行った方がよさそうだな」

「そうだね」

「そうだな。ちょっと疲れたしな」

「村には宿がないですから。私の家に空き部屋があるので、使ってくださいませんぞ」

「おばあさん。ありがとうございます。」

村長が宿を出し、ジュードがお礼をいった。

村の中を見ると、果物のなった木があった。

「いい匂いの正体はナップルの実だ。甘酸っぱくて美味しいんだよね」

「じゅる．．．．．そうなのか」

「ああ、ちょうど食べ頃だな」

「じゅるる．．．．．興味深いな」

「ミ、ミラさん！？ヨダレが凄いことになってますことよ？」

当麻は慌ててポケットからハンカチを取り出し、ミラの口の周りをふく。

「じゅるる．．．．．なぜか．．．．．じゅるる．．．．．  
とまらないのだ」

そして更にさっきよりヨダレがでてる。それを当麻がハンカチでふいて、またヨダレがでる。ふく、でる、ふく、でる。  
繰り返しである。

「・・・・・・・・・食事に目覚めちゃったんだね。」

「盗み食いすんなよ。追われる理由が増えちまうからな」

「しゃべってないでミラのヨダレを止めてくれえエエエ!!」

そして当麻のハンカチはヨダレが止まるまで、吹き続け、ハンカチはじゅくじゅくになった。

そして探索が終わり。村長の家に向かい、1日休むのであった。

次の日

「・・・・・・・・うう・・・・・・・・あまり寝れなかった・・」

当麻は慣れない場所であつたためか、あまり眠れなかった。

普段は風呂で寝ていたので、やはり久しぶりであつたためかなかなか寝付けなかった。ふと周りを見渡すと。

「・・・・・・・・あれ？ジュードは？」

「ジュードならさっき部屋にでたよ」

ふと横から声が聞こえた、振り返ると。

「アルヴィン。」

「よお。あまり眠れなかったようだな。」

「ああ、慣れない場所だからか、寝れなくてな。」

「そうかい。それじゃ先にでてるぜ」

「ああ。」



そして支度の準備をし、部屋からでて、外にでると、ミラとジュードが居た。何やら真剣な表情で話している。

当麻は声をかけようか迷っていたその時

ガヤガヤッ．．．．．

街の入り口が騒がしくなってきた。

「アレは確か、イル・ファンで見かけた．．．ラ・シュガル兵！  
？なんでここに？」

当麻はなんでラ・シュガル兵がいるのか疑問に思っていた。すると

「多分俺たちを追ってきたんじゃないか？。」

「アルヴィン？．．．．！そうだった忘れてた。俺たち今指名  
手配犯だった。」

「もしかして、忘れてたの？」

「あはは、あまり実感がなくて（笑）」

アルヴィンが呆れた表情をして、当麻は笑って言う。

そしてジュード達のところへ行き、合流する。

「どうやら、これ以上のんびりしてるわけにもいかなそうだ」

「やっぱり僕たちを追って来たんだよね……」

「さてな。国外捜査には早すぎるきもするけど。」

「訪ねるわけにもいかないからな。どちらにしても見つかる前に出よう。」

「ああ。村の西に出口があった。キジル海瀑はあっちだろうな。」

「よし、行こう。」

当麻の掛け声で3人は傾き、村の西側のほうへ向かった。

くハ・ミル西部く

西側の出口にラ・シュガル兵がいた。バレぬように身を潜める。

「もう兵士がいる。」

「どうすつよ」

ジュードたちは兵士をどうするか考える。するとミラが立ち上がり

「強行突破だ」

「うん。僕もこれ以上集まる前に抜けちゃった方がいいと思う。」

「・・・短い作戦なこと」

「幸い向こうは二人。こっちは四人がかりでいけばなんとかなるだろう。」

そして作戦が決まり、兵士たちのところに行こうとすると、ジュードは自分の後ろに気配を感じた、そして後ろを振り向き構える。・・・そこにはぬいぐるみを持った少女が立っていた。

「あ、あの・・・」

「女の子？」

「え、えと．．．．．なにしてる．．．．．んですか？」

少女は恥ずかしながらも、顔を赤らめながら聞いてくる。

「うむ。邪魔な兵士をどうするか考えているところだ」

何も隠さずミラが答える。

「．．．．．さらっというやりましたよ。」

「．．．．．直球だね」

当麻とジュードは呆れながらミラに言う。

すると少女が兵士を見ながら

「あの人たち、邪魔．．．．．なんですネ」

すると少女は寝ているぬいぐるみを視線を送ると．．

(一一一)

(○○○) ボヨォーン

目を開けて動いたぬいぐるみに当麻達は驚いた。

そのままぬいぐるみは兵士たちのところまで飛んでいき、兵士たちを怖がらせる。

「・・・ん？、うわ！なんだこれ！」

「ひい！」

「これは・・・」

「どうなってるの？ぬいぐるみが？？」

アルヴィンは小さく呟き、ジュードたちは混乱している。すると後ろから

「ここで何をしてる」

すると大男が現れた。

「こら、娘っ子。小屋を出てはなんというに」

「ラ・シュガもんめ。勝手な真似を」

大男はラ・シュガルの兵士たちのところへ向かった。

その隙に少女は広場の方へ走って行った。

「あ．．．．．行っちゃった．．．．．」

「不思議な子だったな」

「．．．うん」

ジュードと当麻は少女が走っていった方へ視線を向けて言う。  
そして兵士たちを倒した大男はジュードたちの所へ戻って来た。

「娘っ子は、どこに行った？」

大男は少女がどこにいったか聞いてくる。

「広場の方に．．．．．」

ジュードの言葉を聞いた大男は焦り始めた。

「なに？．．い、いかん」

「お前たち、よそ者だな。なら、とつとと行ってしまえ。」

そういい、大男は走って広場の方へ向かった。

「よくわかんないけど、手間省けたみたいだな。」

「そうだな。にしてもさっきの大男、デカかったな。」

当麻たちはそのまま村をでて、キジル海瀑へと向かった。

ーチャットー

『ミラは本当に．．．．？』

ア「ミラがマクスウェルってマジなのか？」

ア「確かにちょっと変わってるけど、普通の女にしか見えないぜ」

ジュ「本当．．．．．だと思う。」

ジュ「初めてあった時、ミラは四大精霊を従えてたんだ」

ア「なっ、四大元素を操る最強の精霊たちを！？」

当「アイツ、凄いやつだったんだな。」

ジュ「うん。火のイフリート、水のウンディーネ、風のシルフ、地のノーム．．．．．」

ジュ「僕もあの時初めて見たけど、あれは四大精霊に間違いないよ」

ア「それが事実ならただの女にできることじゃないなあ」

ジュ「うん。」

当「俺も一度でいいから見たかったな、四大精霊。」



ア「なあに、ミラについていけば会えるんじゃないか？」

当「そ、そうか。」

ア「でも、ニ・アケリアに着いたらそこでお別れになるがな。」

当「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

ジュ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

### 『元素の触媒』

ア「しかし、なんでマクスウェル様が人間の姿してるわけ？」

ミ「精霊とは本来、マナの塊だ。そのままでは人間界で活動できない。精霊がこの世界に実体化するには、属性に応じた触媒が必要なのだ」

当「てことはミラは女でもないし、男でもないってことか？」

ミ「ああ、そういうことだ。」

ア「当麻くん。女性じゃなくて、ガッカリした？」（ニヤニヤッ）

当「そ、そんなんじゃないよ」

ミ「・・・話を戻すぞ。例えば、火の大精霊イフリートが火炎によって体を成すようにな」

ジュ「マクスウェルは元素の精霊だよね？」

ミ「人間の体はあらゆる元素を内包している。私の実体化の触媒としては最適というわけだ」

当「もし触媒を失ったらどうなるんだ？」

ミ「元素を集めて新たな触媒をつくり出し、その成長を待たねばならない」

当麻「えっと・・・最初から作るってことだから・・・もしかして、元素から赤ん坊をつくるってことなのか？」

ミ「ああ、面倒だが人間を触媒にするには、肉体の成長になじませる期間が必要なのだ」

ジュ「精霊の主といっても万能じゃないんだね」

ミ「この人間界においてはな」

当「人間界?・・・」

アルヴィン「それにしても、触媒がオッサンじゃなくてよかったよなあ。なあ、当麻くん? ジュードくん?」

当「なんで俺たちに聞くんだよ」

ジュード「僕は別に」

ア「オッサンでもアリ?」

当、ジュ「それは絶対ナシ!」

『山びこ』

ジュ「いい景色だね。叫んだら山びこが、帰ってきそうだね」

当「山びこかあ、そう言えば一度もしたことないな」

ア「試してみたら? そういうのは、若いうちにやっという方がいいぞ、二人共」

ア「俺くらいになると、恥ずかしくてできなくなっちまうからな」

ジュ「そうだね．．．．．やってみようかな」

当麻「．．．．．まあ、一度だけならいいか」

ジュ「じゃあ、僕から」

ジュ「．．．．．や、やっほー」

ア「（やっほー．．．．．）」山びこのつもり

ジュ「アルヴィン．．．．．」

ア「（アルヴィン）」山びこのつもり

ジュ「そーゆーのは恥ずかしくないんだ？」

ア「（まーねー．．．．．）」山びこのつもり

当「．．．．．」

ア「はい。次は当麻くんね。」ニヤニヤッ

当「．．．やっぱ、やらなきゃ駄目なのか？」

ジュ「当麻、諦めたほうがいいと思うよ」

当「．．．．．はあー。しょうがないか．．．．．いいだ

ろう、やってやろうじゃねえか」

ア「お、気合いがはいってるね」

当「・・・逝くぜ、みてるよ」

アル、ジュ「・・・・・・・・・・」

当「・・・・・・・・・・ スウウウウ・・・・・・・・・・ 不幸だああ  
ああああああああ・・・・・・・・・・」

（ふこうだああああ・・・・・・・・・・） 本当の山びこ

ジュ、アル「・・・・・・・・・・」

当「はあ、はあ、はあ・・・・・・・・・・ ど、どうだっ・・・・・・・・・・」

ジュ「え、えっと・・・・・・・・・・ その」

アル「・・・・・・・・・・ なんていうかその・・・・・・・・・・ からかって悪かった・・・・・・・・・・」

『ミラのヨダレ』

当「あ、あのミラさん？そろそろヨダレをおさめてくれませんか？」

ミラ「．．．じゅるる．．．．．すまない．．．．．あの果物をみると、どうしても．．．．．じゅるる．．．．．とまらないのだ．．．」

当麻「く、くそ。このままじゃラチがあかねえ。ちよつと待ってろ．．．．．」

ミラ「じゅるる．．．．．どこいくのだ当麻．．．．．じゅるる．．．．．」

（数分後）

当「ミラ、ほれ。」

ミラ「じゅるる．．．．．これは．．．．．さっきの果物ではないか．．．．．じゅるる．．．」

当「ああ。さっき村の人たちからもらったんだ。」

ミ「じゅるる．．．．． すまない。それじゃ．．．．． じゅるる頂こう．．．．．」

（数分後）

ミ「．．．．． ごくん．．．．． うむ。これはなかなかの美味だ。甘酸っぱくて口のなが爽やかな感じだ。そして、何よりも美味い」

当「はは。そいつはよかったな。」

当「（なんかミラの食べる姿がインデックスに似てるよなあ．．．）」

ミ「ありがとう当麻。おかげで腹が満たされた上にヨダレも治まった」

当「どういたしまして」

ミ「すまない。今度何かお礼をする。」

当「いいって、あれは俺が勝手にやったことだからさ」

ミ「そういう訳にはいかない。今度ニ・アケリアで礼は必ずする。」

当「………わかったよ………」

ミ「うむ。それじゃ村長の所に戻ろう」

当「ああ。」



## 第7話 〈キジル海瀑〉

〈ガリー間道東部

〉

「ねえ、ハ・ミルにいた女の子だけど．．．．．」

ジュードがさっきの女の子についてアルヴィンに聞く。

「ああ、あの変な人形もってた。あの子がどうかしたのか？」

「どうって．．．．．気にならないの？」

「気になるって．．．．．ジュード、もしかしてお前ロリ「違うからねっ」．．．」

当麻はもしかしてと思い口にだそうとするがジュードに止められる。そして話を戻し

「んゝ、関係ないことを、気にしてられないんだよ。大人は」

「けど、変なもの操って、怪しい人に追われてて．．．．．普通じゃなかったよ」

「確かに普通じゃなかったな。腹話術にも見えなかったし、何よりさっきの大男のこともあるしな。」

ジュードは女の子のことは少し気になり、心配していた。当麻も少なからず心配していたようだ。するとアルヴィンは

「そりゃ、事情はいろいろだろ。あの子も、おたくらも、俺も、な。んで、大抵の人間は、自分の事情だけで精一杯。違う？」

「．．．．．」

アルヴィンの言葉で黙りこむジュード。すると当麻が口を開く

「でもそれでも俺は、もしあの子が助けを求めたら、俺は助けにいくぞ」

「仮に、おたくが首を突っ込んで。それが厄介事になっても？」

「・・・・・・・・・・それでもだ」

「・・・・・・・・・・」

そしてアルヴィンと当麻は黙り、お互い睨みあう。ジュードはどうしたらいいかわらず、オロオロしてる。するとアルヴィンがふと笑い

「ふ、冗談だよ、そんなに睨むなよ。ま、普通じゃないから不幸ってわけでもないさ。ミラを見ろよ。不幸なんて感じたこともなさそうだ」

「・・・・・・・・・・確かに」

こうして会話が終わり、次の目的、キジル海瀑へと向かう。

（数時間後）

キジル海瀑 東岸

キジル海瀑に入ると、そこは綺麗な海辺を思い出させるほど綺麗な小さな湖がある

「このキジル海瀑を越えれば精霊の里、ニ・アケリアか。  
……連中も追ってきてないな」

アルヴィンは追ってが来ないことに安堵する。しかしそんな中、ジュードが浮かない顔をしている

「村の人たちに悪いことしちゃったね……よくしてくれたのに」

人の心配が多いジュードにアルヴィンが言う。

「ラ・シュガル兵が来ているんだ。逃げるが勝ちってな」

「どうするか決めたのは、彼らだ」

そんな冷たい風に言うアルヴィンやミラに少し怒った表情をしてジュードは言う

「僕らを守ってくれたのかもしれないだし、そんな言い方しなく

ても……」

ハ・ミルの住民達を心配するジュードにミラは

「気になるのか。ならジュード、君は戻るといい」

そういい、勝手に別れを告げ、ミラは歩きだす。

「ちょ、ちょっと待てよ。何もそんな言い方はしなくてもいいだろう？、ジュードはただアイツラ（ハ・ミルの住民）の事が心配してんだよ。なのにそんな言い方はしなくてもいいだろう」

当麻は慌てながらもジュードを庇い、ミラに言う。

「それはもつと感傷的になってほしいのか？……それは難しいな。君たち人もよく言うだろう？感傷に慕ってる暇はない、とな」

当麻の言葉にミラは動じず、ミラは言う。するとジュードが言う。

「それは．．．」「それは使命があるから？」

「そうだな」

「やるべきことのためには感傷的になっちゃいけないの？」

「人は感傷的になってもなすべきことをなせるものか？」

ミラの問いに首を振るジュードは

「分からないよ。そんなの．．．．．。やってみないと．．．．．」

「だったら、やってみればいいじゃねえか？」

「え？」

ジュードの返答に当麻が答える。

「そうだな。そうすれば、君のなすべきことを、そのままの君で、

それで答えがでるかもしれない。」

「自分のしたいことをやればいいんじゃないか？そんな難しいこと考えなくてさ。自分のなすべきことおさ」

「僕のなすべきこと……」

ミラは3人から少し離れ、心の整理を待った。当麻はミラの行動をみて、何か感ずいたようだ。そして当麻は微笑みながらジュードに言う。

「別にミラみたいになる必要はないさ。てか誰だってああはなれないって」

人は誰だって同じ人間になれない。自分は自分なのだから。

「……………は。」

「ん？」

「当麻にはなすべきことってある？」

ジュードは当麻になすべきことがあるか聞いてみる

「……………さあ、な。俺にもよくわからねえ。……………けど、目の前の人間が不幸な目にあったら、俺は見捨てることは絶対にできねえ。」

「意外にお節介なんだな」

アルヴィンは意外だったのか、それを口にする。当麻は軽く笑いながら言う。

「……………確かにそうかもな。勿論それは甘いつても自覚してる。そのおかげで不幸な目にあっているしな。」

「……………前向きなんだね」

「いつまでウジウジしたって何も始まらないからな。」

「……………アルヴァイにはなすべきことってある？」

ジュードはアルヴィンにも聞いてみる。するとアルヴィンはジュー



ドと当麻に近づき、ジュードと当麻の肩に腕を回す。

「……………さて、な。あるって言ったら余計迷うだろ。ジュード君？」

「え」

「僕も決めなきゃってな」

ジュードは何かを考える。

「んで、どうすんの？村に戻る？」

「……………ううん」

「んじゃ、行こうぜ。にしても当麻君はこれから何をするか決まったような顔だな。」

「んー。まあな」

アルヴィンは当麻に視線を向け、何かを感じていたようだ。そして当

麻は肯定する。

そして当麻は視線をミラの方へ向く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「んで、どうすんの？村に戻る？」

「ううん」

「んじゃ、行こうぜ」

そして会話が終わり、当麻たちはミラのところへ近づき、合流する。  
そしてキジル海瀑の奥へと進む。

キジル海瀑東岸

「すげえな。海からみたら槍みたいな岩が生えてる。」

「不思議な地形って、霊勢がぶつかる場所にできるんだってね」

「そうなのか。てか、こんなに広い場所だと道に迷ってしまうな」

そんな会話をしながら崖を登ったり、降りたりして、どんどん奥へと進む。

くキジル海瀑、滝下く

奥まで進む途中、当麻達は大きな滝のある場所まで来ていた。

「もうすぐニ・アケリアかく。どんなところなんだろう。．．．．  
．  
いいところなの？」

「うむ。私は気に入っている。瞑想すると力が研ぎ澄まされる気がする。落ち着けるところだ」

ジュードはどんな所か興味をもち、ミラに聞く。ミラはニ・アケリアの良いところを説明する。

「好きなんだな。ニ・アケリアが」

「ああ。空気もうまいし、景色もいいぞ。きっとお前たちも気に入ると思う。」

ああ、安心するといい。皆は優しいし、面倒もみてくれる。イジメなどないから大丈夫だ」

「ミ、ミラさん？だからワタクシたち何もイジメられてませんよ？」

「そうだよ。ミラ」

ミラの勘違いにより、当麻とジュードのイジメについては、まだ誤解を解いてなかった。それを違うと弁解するが、ミラには聞こえなかった。

そしてそんな会話をしながら後ろからアルヴィンが言う。

「ちょっと休憩。」

岩場歩きで、足痛え」

「到着してから休めばいいだろう？」

「そう言うなって。ニ・アケリアは逃げはしないさ」

そういうながらジュードと当麻の肩に手を置き、腕を回す。

「な？休もうぜ？」

アルヴィンは視線をジュードと当麻を交代に見ながら言う。そう言われてジュードは

「え、うん。じゃあそうしようかな」

「別にいいが、てか、あんまりくつつくなよ」

当麻も了承するが、余りにもくつつくのでアルヴィンの腕を振りほどこうとする

「そんなに恥ずかしがるなよ W W W」

「なってねえ!!」

こうして当麻達は少し休むことになった。

「アルヴィンって結構気を遣ってるんだね」

「ま、無理に気持ちを切り替えようとしてるお前さんが気になったのは確かだ。」

「無理してるようにみえちゃったんだ」

「でも、ホントに大丈夫だよ。僕、難しく考えないようにするのが得意な方だから」

「へー。そんな風に見えないけどな」

3人はそんな会話をしながら笑いあう。  
しかしそんな会話が終わる。何故なら滝の方から悲鳴が聞こえた。  
そして3人は声の聞こえたほうへ掛け抜く。すると

「誰？」

そこに見えたのは謎の女性とミラが居た。ミラは女性にバインドで拘束されていた。

ジュードがその女性に聞くと、女性はアルヴィンの方へ視線を向ける。

「今は、この娘<sup>こ</sup>にご執心なのかしら？」

「放してくれよ。どんな用かは知らないが、彼女、俺の大事なひと（雇い主）なんだ」

「近づかないで。どうなるか、わからないわよ」

女性はアルヴィンを見ながら本を構える。

「（くそ。俺の右手があ<sup>バインド</sup>の縄<sup>バインド</sup>みたいのに触れればミラは助かる。だけれどあの高さじゃ……）」

そう、当麻の右手、幻想殺し（イマジンブレイカー）があ<sup>バインド</sup>のバインドに触れれば消滅する。しかし相手は中に浮いていて、距離もここ

から離れている。下手して動いたら彼女の危険が及ぶ。

当麻は苦虫を噛みしめながら悔いでいた。その頃ジュードは手を額に置いて何かを考えていた。そしてジュードはミラの視線からゆっくりと岩のある方向に向ける。するとジュードは何かを閃いたのか目を大きく開く。

「アルヴィン、当麻、そのまま聞いて。．．．．．右上の岩。撃てる？．．．．．もしかしたらミラを助けられるかもしれない。」

ジュードはアルヴィンと当麻に聞こえるように喋る。そしてアルヴィンにあの岩を撃てるか要求する。するとアルヴィンは左手に持っている銃を肩まで持っていき、ジュードに聞く。

「すぐ撃っていいのか？」

「え？．．．．．うん」

ジュードは突然言われたためか一瞬呆けながらも笑顔で肯定する。そしてアルヴィンは銃をリロードする

「あら？この娘は見殺し？ひどいヒト」



女性は相手が動きをみせたのを気づき、ミラがどうなってもいいのかと警告するが、アルヴィンは女性の言葉を無視し、銃を岩の方へ向き、発泡する。

パンツ！パンツ！パンツ！

それを見事に岩に命中する。そして少し時間がたつ。・・・するとその時岩が急に動きだした。すると岩の下から長い足みたいなのが何本かでできた。女性は驚き悲鳴をあげる、

「ヒッ！？」

女性は驚きのあまり、ミラにかけていたバインドが消滅する。そのせいでミラは落下していく。

「間に合えっ！」

当麻は落ちていくミラに駆け寄る。そして上手くキャッチし、ミラ

を支える。

「大丈夫か？」

「う、うむ。すまない。助かったぞ」

そして先程落ちた岩の正体は魔物であった。魔物は女性の方へ向き突っ込んで来た。そして女性はモロにくらい吹っ飛ばされ、壁に激突する。そしてそのまま水面に落ちていった。当麻はミラを降ろし、ジュード達のところへ駆け寄る。

「まったく。乱暴だな」

ミラは苦笑いのままアルヴィンに言う。

「そう言うなって。とにかくこいつを片付けようぜ」

「来るよ！」

当麻達は武器を取りだし、構える。  
そして戦闘が始まった。

V S グレーター・デモツシュ

戦闘が始まる同時に飛びかかって来た。 4人は上手く避け、戦闘の配置に立つ。

そしてその隙に攻撃を仕掛ける。  
まずアルヴィンが技を放つ。

「ヴァリアブルトリガー」

アルヴィンは左手に持っている銃で魔物に向け、発射する。すると魔物は当たり、怯みだす。 アルヴィンはチャージしながら、何かに気づく

「……どうやらコイツの弱点は火のようだ。ミラと俺は火の精霊術で応戦する。当麻とジュードは奴を畳み掛ける。」

「了承した」

「わかった」

「うん」

3人は了承し、そしてすぐにアルヴィンは攻撃を仕掛ける。

「ヴァリアブルフラッシュ」

チャージ時は威力が上がっているので、さっきよりダメージを与える。そこへ

「ファイアボール」

ミラのファイアボールでさらに攻撃を加える。そしてアルヴィンの予想通り、魔物は悶え苦しむ。効果は抜群のようだ。

「よし、二人共、行け」

「瞬迅拳」

当麻が瞬速の突きを繰り出す。そして共鳴<sup>アーツ</sup>が発動した。

「あれをやるぞジュード」

「うん」

「「衝破十文字！！」」

瞬迅拳と瞬迅拳で交差し、十字の中心に収束した力は時間差を伴い、魔物は爆発した。

ドガアアアン！！

「やったね。当麻。」

「ああ。修行の成果だな」

「そんなじゃ、記念に一杯やっちゃおう？」

「いや、俺（僕）たち未成年だし」

戦闘が終わり。当麻達は武器をしまう。

「魔物が擬態してたのか。よく気づいたな」

「魔物があの女ではなく、真っ直ぐお前たちに向かうとは考えなかったのか？」

「それでもよかったんだ。そうすれば、アルヴィンがあの人の死角に入れる位置だったからね」

ジュードは例え違う状況だったとしても予測を立てていたようだ。

「すごいな。あの一瞬でそこまで……………」

「大したものだ。誰にでもできることではないな」

「ああ、やっぱジュードはすげえよ」

「僕にしかできないこと……………」

「ありがとう。ジュード、アルヴィン、そして当麻……………さつきは助かった。」

ミラは二人に、素直にお礼をいい、当麻には深くお礼をいい、当麻の目線を見つめる

「ま、まあ上条さんは当然の事をしたまですよ。とにかく皆無事でよかったよ」

ミラに面と向かって礼をいわれたためか。当麻は恥ずかしながらも

平静を装う。

「そうだ、さっきの人は？」

ジュードはさっきの女性の事を聞く。

「優等生。悪い奴まで気にしてたら、日暮れるぞ。な、不良高校生？」

「ダレが不良高校生だ！ダレがつ．．．．．まあそういうことだ。さっさと行こうぜ」

「それにしても綺麗な海だな。どう？一緒にひと泳ぎ？」

「お前が飛び込むのは構わないが、海中にも魔物がいるようだぞ。」

「．．．．．」

「ん？うわっ。てめえ、何俺を落とそうとしやがるんですか？」



アルヴィンは無言で当麻の後ろに回り込み、ゆっくりと背中を押す。

「いやー、ホントに魔物がいるか試したくてな」

「俺を試すな！てめーはアレですか。この上条さんに死ねと申しますのですか？」

「安心しな。骨は拾ってやるから」

「安心できるかー！」

そんなアホな会話をしながら、ニ・アケリアへとすすむのであった。

ーチャットー

『巨大モンスター』

当「しかし驚いたな。あんなに巨大な魔物がいるなんて」

ジュ「<sup>ゲート</sup>霊力野の突然変異で原因で、魔物が巨大化することがあるんだよ」

ア「……って、本に書いてあった？」

ジュ「うん」

ア「まったく、優等生は冷静すぎてつまんねーな」

ミ「お前も、ずいぶん冷静なようだが？」

ア「俺は、ああいうの見たの初めてじゃないからさ」

ジュ「アルヴィンは、世界を回っているものを見てるんだね。」

ア「それでも、あんなデカイのに正面からケンカ売る奴を見たのは初めてだけだな」

ミ「ふふ、新鮮な経験ができてよかったじゃないか」

当「あんな経験は上条さんはこりごりですよ」

# 『好みの女性』

ジュ「ねえ、さっきの人知り合いだったの？」

ア「あー。あれね。なんか向こうは知ってたみたいだけど、俺は」

ミ「傭兵とは、恨みを買う商売のようだな」

ジュ「でも、キレイな人だったね」

ア「ああいうのが好み？ ジュード君は年上好みか」

ジュ「よくわからないけど、そうなのかも。」

ジュ「じゃあ当麻は、どういうのが好み？」

ア「当麻くんもやっぱ年上好み？」

当「俺か？……………そりゃあもちろん落下型ヒロインのみならず、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツイントールポニーテールお下げ三つ編み編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリショタツンデレチアガールスチュワートデスウェイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯スクール水着ワンピース水着ビキニ水着スリングショット水着バカ水着人外幽霊獣耳娘だな」

ジュ、ア、ミラ「「」」  
「」

当麻「………というのは、俺の悪  
友が好きな好みで、上条さんの好みは……寮の管理人のお  
姉さんです………はい………だからワタクシをゴミを  
見るような目で見ないでくれ！」(T|T)

## 第7話 くキジル海瀑く（後書き）

今回も幻想殺し出番なしでした。スイマセン。

そういえば上条さんにマナなんてありませんよね？

**第8話　くマクスウェルを祀る里　ニ・アケリアく（前書き）**

猛将伝がハマって時間がかかりました。

では八話投稿です！

## 第8話 〈マクスウェルを祀る里 ニ・アケリア〉

〈精霊の里ニ・アケリア〉

「ここが．．．．．」

「へえ、意外と普通の村だな」

「さっぱりとした村だな」

アルヴィンと当麻は、ニ・アケリアの村を見て、感想を口にする。  
見た目から言うと、田舎のような村だった。  
するとミラは村の住人のところへ近づく

「すまない。イバルはどこにいる？」

「ん？ イバルならマクスウェル様を追って．．．．．」

老人は喋りながら立ち上がり、そしてミラの方へ振り向く。

「マ、マクスウェル様?!」



老人は即座に片膝を地面に付け、崇め始めた。

「うむ。今戻った」すると、村の住人達はミラの存在に気付き、近付いて来る。

「あ、わわ、私なんかにお声をかけて下さるなんて」

「やっぱ、本物なんだよな」

アルヴィンはその村の住人の様子やミラを見て、改めてミラがマクスウェルだと再確認する。

そして近付いてきた村の住民達は老人と同じように拝める姿勢になる。

「ミラ、すごいんだね」

「ああ、まるでミラが神様みたいだな」

「ちょっと疑ってたんだがな」

その光景をみてジュードは純粹に感動し、当麻は神のような存在だと思った。

アルヴィンはどうやらミラのことをまだ疑っていたようだ。

「緊張するな。普段のとおりにしていればいい」

ミラは村の住民たちにそう言う。どうやらミラはこういう特別扱いは苦手のようだ。

「それより、イバルは、今いないと言ったか？」

「は、はい！いつもより戻りが遅いと心配して……………」

「そうか。相変わらず短気だな……………手を止めさせてすまなかった」

ミラは呆れたようにそう言い、村の住民に謝罪し、その場から離れ、歩きます。当麻たちもミラの後に付いていく。

歩き始めるとミラの姿を見るたびに村の住民が拝める姿勢をとる。実に殿様気分のようなのだ。

「私は、これからすぐに社で再召喚の儀式を行う。だが、巫女が不在のようだ。悪いが少し手伝ってもらえないか？」

「？。別にいいが、何をすればいいんだ？」

当麻は何をすればいいかミラに聞く。

「ああ、まず村には四つの蔵があり、そこには世精石よしようせきがあるんだ」

「それをすべて、ミラの言ってた社まで運べばいいの？」

「うむ」

ジュードはそう言い、ミラは傾く。

「それなら、村の人に頼んでもいいんじゃないの？」

アルヴィンは思っていたことを疑問にミラに聞く。

「さっきの見たろう？ 巫女以外は日頃、私とあまり接していないからな。あれでは全く話にならない」

「ふーん。ま、力仕事は男の役目かね」

「そうだよ。アルヴィン」

そしてある程度先に進み、そこでミラは立ち止まり、ジュードと当麻に言う。

「二人共、すまない。村の件は儀式のあとで村の者に頼む。もうしばらく待って欲しい」

「あ、うん」

「・・・・・・・・ああ」

ジュードは少し戸惑いながらも返事をし、当麻は何か考え、遅れながらも傾く。そしてジュードは開き直り、

「じゃあ、世精石を探そう。村の中にあるんだよね？」

「ああ、四つ集めて社に運んでくれ。社は村を抜けた先だ」

そして当麻たちは世精石を探すことになった。世精石は全部で四つあるので、一人一つという形で取るようになった、当麻達は散り散りになり、石を取ることにした。

ジュードとミラ、アルヴィンは問題なく取れたのだが、当麻の場合、

橋の下の岩場の先にあるため、それを取ろうと当麻は降りたのだが、そこで不幸スキル発動。足が滑り、見事に水面に落ちた。びしょ濡れになりながらも根性で世精石を取ることができた。そして無事？に集合地点に合流した。

「あ、当麻．．．ってどうしたの！？ズブ濡れなんだけど．．．．．」

「あ、ああ。気にするな。これくらい上条さんの不幸と比べたら．．．．．」

戻ってきた当麻の姿を見て、即座に驚いた。

「ふむ、当麻の不幸はなかなか面白いものだな」

「．．．．．上条さんにしては全然面白くもなんともないんですけどな．．．．．」

「ま、なんにしてもこれで世精石は揃ったな。とっところこうぜ」

当麻達はミラの社に向かうため、ニ・アケリアの参道へ向かうのであった。

ーミラの社 境内ー

ニ・アケリアから参道を進んでいき、ようやくミラの社に到着した。

「この奥だ」

建物はさっきの村のと差程変わらなかった。ごく一般的な建物であった。

「ミラはここに住んでるの？」

「住んでいる、か。そう考えたことはないがそういうことになるか」

「何もないところだなあ退屈じゃなかったのか？」

「私の使命においては、なんの問題もない。人の記した書物などを  
読んだりもしたがな」

「ミラは本を読むことが多いんだな」

「うむ。そのせいか、一日中読むふけてしまうこともある」

「マジかよ。勉強熱心だなあ。俺だったら絶対発狂するぞ」

「そうなのか？ 中にも育児本がハマっていてな。それを実験にジュードに試したのだが、あまり効果がなくてな、なかなか難しいものだな。」

「ハハ、本当、ミラって変わってるよな」

「さあ、儀式をすませよう」

そしてミラは社の中に入り、当麻達も遅れて入る。

ミラは四大精霊を再召喚させる儀式に取り掛かる。床に描かれた円形の召喚陣の上に、ジュード達は、集めた世精石を召喚陣のところに設置する。

「これでいいの？」

「うむ。助かった。」

ジュードはこれでいいか、ミラに聞き、ミラは肯定し、礼を言う。  
ミラは今召喚陣の上に座っている。当麻達は陣から離れる。そして  
ミラは四大精霊を召喚するための召喚陣を発動させる。ミラは宙に  
も同じような魔法陣を描いていく。

すると集めた世精石が光りだす。しかし何が起きたのか石が急に割  
れはじめた。ミラは倒れそうになるが、なんとか手で地面に押さえ、  
なんとか保つ。

「ミラ！」

ジュードは声を荒げながらミラを叫ぶ。

そんなときだった

「ミラ様！」

誰かがミラの名前を呼ぶ、そしてジュード達とアルヴァイの間を通  
ったのだが

グシッ！

「んぎゃ！」

運悪く、当麻の足を踏まれてしまった。男はそれを無視し、ミラの  
ところへ近づき、膝まづく。



「・・・・・・・・イバルか」

ミラは肩で息をしながらイバルを見る。

「ミラ様。心配いたしました」

イバルは目をふと開き、周りを見渡す。そして粉々になっている世  
精石を見る。

「これは四元精来還しげんせいらいかんの儀？何故今このような儀式を。しかし、これ  
は。」

イバルは立ち上がり

「イフリート様！ウンディーネ様！・・・・・・・・」

社の中に四大達の名前を叫ぶが、一向に現れないのに疑問を持った  
イバルは、ミラの方へ振り向く、

「ミラ様。一体何が・・・・・・・・」

そしてミラはイバルに全てを伝える。

「・・・・・・・・足いてえ・・・・・・・・」

「大丈夫？」

「不幸だぁ」ボソッ

「俺のセリフをマネするなぁ！」

「数分後」

「そんなことが・・・・・・・・」

話を全部聞いたイバルは驚く。

「んで、精霊が召喚できないのってそいつらが死んだってこと？」

話を聞いたアルヴィンはミラに聞く。するとイバルが

「バカが。大精霊が死ぬものか」

「あれ？常識？」

「大精霊も微精霊と同様、死ねば化石となる。だが、力は次の大精霊へと受け継がれる！」

「……って、言われてるね。見た人はいないけど」

「あー、それね」

「へー」

「ふん。存在は決して死なない幽世<sup>かくりよ</sup>の住人。それが精霊だ」

それを聞いたジュードは人差し指をこめかみに押し当てて、考える。

「だったら四大精霊は、あの装置に捕まったのかも」

「もしかしてクルスニクの槍か？」

当麻はジュードのいったことを反応し、その名を口にする。　ジュードはそれを小さく傾く。その言葉を聞いたミラは目を細める。本来四大精霊はマナの塊のようなもので、普通は捕まえることは不可能である。しかしマナを貯蔵するという機能があつた黒匣にあるとしたら話は別になる。

「バカが！人間が四大様を捕らえられるはずがない！」

イバルは人差し指をジュードに向け、ジュードの推測を断固拒否し、反論する。

「いや、その可能性は十分にあり得るんじゃないか？いくら四大精霊が凄いつつても、それが必ず捕まることは絶対には言い切れないだろ」

「うん。ありえないことでも、他に可能性がないなら、真実になり得るんだよ」

「何もない空間で、卵がひとりでに潰れた場合、その原因は卵の中にある．．．．．『ハオの卵理論』ってやつだな。さっすがな」

「ぐぬぬぬぬ！！こ．の．凡愚どもめく！」

それを聞いたイバルは拳を力いっぱい握っていた。

「四大を捕らえるほどの黒匣だったというのか．．．．．あの時、私はマクスウェルとしての力を失ったんだな」

ミラはイル・ファンのラフォート研究所の中にあつたクルスニクの槍を思い出す。

「．．．．．ミラ？大丈夫か。なんかボォツとしてたが」

「！。ああ。少し考えることをしてた。大丈夫だ」

当麻の声でミラは思考を中断する。そしてミラは立ち上がる。すると

「さあ！貴様たちは去れ！ここは神聖な場所だぞ！ミラ様のお世話をするのは、巫女である俺だ！」キラッ

イバルはジュード達を追いかえそうとする。自分が特別なのか威張りながら。

「イバル、お前もだ。もう帰るがいい。」

「は？」

ミラに帰れと言う言葉に、間の抜けた声を出したままミラの方へ振り向く。ミラは奇怪な表情でイバルに言う。

「そうだな。有り体に言うぞ。うるさい」

「な．．．．．」

ガガーン（□；）！！

ミラの言葉でイバルはショックを受けた。そして目に涙を浮かべ、肩を落とし、フラフラとジュード達と一緒に出て行った。

「・・・・・・・・四大を救い出すのにも、これがなければならぬ、か」

社を一人で残ったミラは懷から何かを取り出し、それを見て、そう呟いた。

※※※※※※※※※※

「ま、まあそんなに落ち込むなよ。元気出せて。ナップル食べるか？」

外に出た当麻達は、落ち込んでいるイバルを慰める当麻。

「うるさい。お前に慰める筋合いはない！それよりも貴様らがしっかりしてないおかげでミラ様があんなことに！。くそ！俺がついて行ってくれば」

「だったらなんでついていかなかったんだ？ってさりげなくナップルを取るなっ！」

当麻はなんでついていかなかったのか疑問にイバルに言う。ちなみにいつの間にかナップルを取られていた。

「俺だってミラ様のためなら例え火の中水の中、何処までもついて行くさ！しかし俺はミラ様を守る使命だけじゃなくこの村の人達も守らなくてはならない使命がある。それをミラ様にいわれ、だから仕方なくこの村に残ったのだ。それなのに貴様らときたら……」  
「ウガアアア……」

イバルは当麻達に説明し、怒鳴りながら頭をかきむしる。

「マジで短気なヤツだなあ」

アルヴィンはイバルを見て、短気な性格だと認識する。ジュードはイバルの怒鳴り声が聴こえていないのか、人差し指を額に乗せ、何かを考える。それを見たイバルは驚きながらもジュードの肩を掴む

「貴様！聞いているのか！」

「あ、ごめん。何？」

ジュードはイバルに肩を掴まれ、イバルに聞く。

「チッ！」

イバルはジュードの反応がムカついたのか舌打ちする。



「いいか。これからもミラ様のお世話は俺がする。余計なことはするなよ！」

ジュードはイバルにそう言われ、ジュードは無言になってしまう。アルヴィンはヤレヤレといった感じた。当麻も軽くため息をこぼす。そしてイバルはナツプルを食べながら村の方へ帰っていった。当麻は「やっぱりやるんじゃないかった」と後悔していた。あまりにも可哀想だったからついってしまったのだから。イバルが去った後、アルヴィンがジュードに近づく。

「もう少しここにいるか？」

「うん」

「そうか。当麻は？」

「そうだな。村に戻ろうかな」

「んじゃ、先に戻ってるわ」

「先に行って待ってるな」

アルヴィンと当麻はジュードに言い、ジュードは首を縦に振る。そして二人は村の方へ歩いた。ジュードは二人の姿をいなくなるのを確認する。

「なすべきこと．．．．．自分の力．．．．．」

ジュードは自分の手のひらを見てそう呟いた。

※※※※※※※※※※

＼SIDE当麻＼

私上条当麻はニ・アケリアに戻るため、アルヴィンと一緒に歩いている。正直魔物があちこちに居るな。今は大分慣れたが、変わった魔物が多すぎる。学園都市では絶対に見れないな。しかし、クルスニクの槍や四大精霊か。やっぱどの世界でも平和を乱す輩がいるん

だなあ。

そんなことを考えている途中、アルヴィンが声をかける

「お前は村に戻ったらどうすんだ？ミラに言われたとおり、この村に住むのか？」

「うーん……いや、残らねえかな。俺にもやることがあるからな」

そう。俺にもやることがある。おそらくジュードもミラの手伝いかでこの村に残ることはないだろうな。意外とお節介のようだしな。

それに俺も元の世界に帰る方法を見つけねえと。ミラには悪いがこの村に住むわけには行かないからな。もつとも第一優先はそれじゃないんだが。さて、どうしたものか

「アルヴィンはこれからどうすんだ？」

「まずマクスウェル様から報酬をもらわないとな」

報酬？そう言えば俺たちを助けた理由は金になるからだったな。そ

んで後でミラからもらうのか。

「それじゃ報酬もらった後はどうすんだ？」

「ああ。そこで依頼達成。他の仕事を探すため、お別れだな」

「・・・・・・・・そっかあ」

「ん？何？もしかして別れるのが寂しい？」

「ちげえよ。ただまたどこかで会いそうな気がしてさ」

「確かにな。まあその時に困ったときがあったらいいな。報酬はもらうがな」

「・・・・・・・・まあ考えておくよ」

報酬かあ。つっても金がないしな。ゲコ太ストラップじゃ駄目かな？いやそんなことをしたら俺は間違いなく超電磁砲レールガンキャッチボールを堪能してしまう！・・・・うう・・・・考えただけで鳥肌があ・・・・それだけはやめておこう。

そんな会話しながら俺とアルヴィンはニ・アケリアへと進むのであった。

# SIDE OUT

ニ・アケリア

「さてと、俺はここで待つとしますか。お前さんはどうする？ここで待つか？」

ニ・アケリアの入り口に着いたアルヴィンは当麻に聞く。

「とりあえず、この町をみて回ろうかな」

当麻はアルヴィンにそう言い、この町を見て回ることにした。

そしてある程度時間が経ち、村の入り口にミラ達がいた。当麻はミラ達のもとへ駆け寄る。

ミラ達も気づき、当麻の方へ振り向く。

「どうやらこれからどうするか決まったんだな」

「うん。ミラと一緒に行くことにしたよ」

「そっかぁ・・・・・・・・」

当麻はジュードの返答がわかっていたのかあまり驚いていなかった。

「当麻はこれからどうするの？」

「ああその事なんだけどさ、俺も一緒についてっていいか？」

当麻の返答に、ジュードとミラは驚いた表情をするがすぐに元の表情に戻る。

「・・・・・・・・いいだろう・・・・・・・・」

するとミラはアツサリと了承してくれた。

「・・・・・・・・やけにアツサリだな。てっきり断られるかと思ったんだが」

当麻はミラのことだから「来るな」と言われると思った。

「そうだな。君もジュードと同じような気がしてな、そう言うと思  
っていた」

どうやらミラは当麻の性格を少なからずわかっていたようだ。きつ  
と当麻もジュードと同じお節介だと。そして絶対について行くと、  
ミラはそう感じていた。

普段は人間の感情に関しては疎いのだが、短い旅路だが当麻達と共  
に行動し、少しずつだが人間の感情を理解するようになって来てい  
るようだ。

「本当はジュードと君を巻き込まぬよう、ひとり遅れて社を出るは  
ずだったのだが、ジュードに見つかってしまったな」

「それで、俺たちを追い返したのか」

「ああ、だが見つかってしまった以上、急いで発つ意味も弱くなっ  
てしまったからな。おそらく当麻もジュードと同じことを言うと思  
がしてな」

「何もかもお見通しだったのか、まいったな」

「ふふ、君たちとの短い旅路で学んだ気を使うというヤツだ。案外難しいものだな」

「しかしいいのか？この先、何が起こるのか分らない。もしかしたら命を落とす事もある。それでもいいのか？」

ミラは真剣な表情で当麻に言う。当麻も真剣な表情でミラに言う。

「ああ。もちろん百の承知だ。俺に出来ることなんてたかが知れてるけどさ。それでもお前の手伝いをしたいと思ってる。」

「……………わかった。それじゃ改めて宜しく頼む」

ミラは当麻に手を差し出す、そして当麻も右手を差し出し、握手を交わした。

これで当麻とジュードは共にクルスニクの槍を破壊するため、ミラの手伝いをする事に決まった。

「どうやら話はまとまったようだな」

すると話が終わったのを見計らい、アルヴィンが前に出てくる。



そしてミラはアルヴィンの方へ向き、近づく。

「アルヴィン、今まで世話になったな。……そうだ、忘れるところだった」

「ん？ 謝礼か？ それなら村のじいさんに、払うって言われたけど？」

「村の人が？」

「ああ。マクスウェル様を守ってくれてありがとうってな」  
アルヴィンが村の住民の真似事をしながらミラに言う。

「ふむ。長老だろう。いらぬことを」

「アルヴィン。それは私の謝礼ではない」

「ミラから、あのじいさんにサンキュって言えば、それでいいだろう。じいさんもじいさんなりの誇りがあんだよ。

断るのも失礼ってもんだ」

「……………そういうものか？」

「そういうもんさ」

ミラは疑問に満ちた表情でアルヴィンに聞くがアルヴィンはそういうもんだと促す。

「さてと、じいさんに待てと言われて待ってはいるものの、一向に来なくてな」

「村にいるんだよね？」

「ああ。搜してみるとしよう」

「じいさんに報酬もらったら俺の仕事もそこまでだ。俺がいる内にやりたいことあったら、先に済ませてくれよ」

「わかった」

四人はアルヴィンの言うとうり、長老を捜しながらあちこち村を見て回った。そして大分時間が経った。

そして集会所に入り、遂に長老が見つかった。

「マ、マクスウェル様！ それにお連れの方も。お待たせして申し訳ありませんっ！」

「構わぬ。それよりアルヴィンへの謝礼を用意していると聞いたぞ」

「はい。私たち、戦うことは無理でもマクスウェル様のお力になれるようにと。以前、村のみなで出し合ったお金がありましたな。」

「・・・・・・・・そうか」

ミラは渋々ながらも納得した。

「いったら？」

アルヴィンはミラを見て、そう言う。  
そしてミラは長老に向き直り

「お前たちの誇り、ありがたく受け取るとしよう」

そして長老は謝礼金をアルヴィンに渡した。  
そしてミラはアルヴィンの方へ向き

「ではな。アルヴィン。  
色々世話になった」

「うん。ありがとう」

「何やら何まで色々ありがとな。」

「ああ。それじゃあな」

ミラ達のお礼を言われたアルヴィンはそのまま集会所を出ていった。

「・・・・・・・・なんだかあっけないね」

「傭兵というものは、ああいうものなのかもしれんな」

「けど、案外早く再開したりしてな」

「はは。まさかあ」

当麻は案外早く会えるかもしれないといい、ジュードは「それは無いんじゃないかな」………と思いつつ苦笑する。  
そんな話をしていると………

ガチャ

「ミラ様！」

突然ドアが開き、イバルが入って来た。

「おっと」シュ

当麻はイバルにまたもや踏まれそうになり、間一髪かわす。  
そしてミラの前に立ち、一回膝を着き、立ち上がる。

「またいすこかへ赴かれるのですか？」

「ああ。留守を頼む」

「自分も、ご一緒にいたします！。こんなどこの誰ともわからんヤツらにミラ様のお世話を任せられません！」

イバルはジュードと当麻を手で仰ぎながらミラに言う。どうやらイバルはジュードと当麻をミラの手伝いを任せられないらしい。

「イバル！、お前の使命を言ってみろ」

ミラは険しい表情でイバルに言い、イバルは突然うろたえる。

「え、あ、自分の使命はミラ様のお世話をする事、です」

「ん？確か、もう一つ使命があったような」

すると当麻はあの時、イバルが二つ使命があったと聞かされ思い出し、口にする。するとイバルは鋭い目付きで当麻を睨む。どうやらこのことを言われたくなかったようだ。するとミラはさらに険しく表情し。イバルを直視する。

「・・・・・・・・戦えないニ・アケリアの者を守ります・・・・・・・・」

イバルは諦めたかのようにもう一つの使命を口にした。

「理解したか？私の旅の共は当麻とジュードが果たしてくれる」

ミラが当麻とジュードの名を口にした途端、二人はミラの方へ向く。

「お前は、もうひとつの使命を果たすんだ」

「しかし、こいつらのせいでミラ様は精霊たちを！」

イバルはジュードと当麻を交代にブンブンと指を指しながら言って、勝手に人のせいにする。しかし当麻は精霊を見たことない上に事件に巻き込まれただけなのだが、その事をイバルは知るよしもない。

「それは私の落ち度だ。それどころかジュードと当麻がいなければ。私はニ・アケリアに戻れなかったかもしれない」

「「ミラ………！」」

当麻とジュードは嬉しかったのかそう呟く。

「しかし！」

それでもイバルは納得できないのか、拳を握り絞めながら肩をプルプルと振るわせる。

「なすべきことをもちながら、それを放棄しようというのか？イバル」

イバルの強情ばりにシビレを切らしたのか、ミラは鋭い目付きでイバルに言う。

「……………いえ」

イバルは諦めたのか、弱々しく、傾いた。

「さあ、出発しよう、当麻、ジュード。海停が封鎖されていなければよいのだが」

「あ、ああ。そうだな」

「……………海停に行くのなら、途中、またハ・ミルを通るかな」

「ふむ。では、まずハ・ミルを目指そうか」

「え、それでいいの？」



「ア・ジュール内でラシュガル軍の動向を探れる貴重な場所だ。もしかしたらイル・ファンに潜り込む妙案が眠っているかもしれない」

「確かに作戦もたずにそのまま突っ込むわけにもいかなからな。それがいいか」

「じゃあ、ハ・ミル経由で海停だね」

「マクスウェル様、行ってらっしゃいませ」

長老は拝む姿勢でミラに言う。

「うむ」

ミラは軽く返事を返し、三人は集会所へと出ていく。

「ミラ様！ お、お気をつけて！」

イバルは大きく手をふりながらミラに言うのであった。

それをミラは無視し、集会所へと出ていった。

（????? SIDE）

当麻、ミラ、ジュードがニ・アケリアの入り口を通りかかっているとき、崖の上から眺めている人物達がいた。

「あの女がマクスウェルか。プレザ。確かに、力を失っていたのだな？」

「はい」

「すでに『カギ』もどこかに隠された可能性があるとなると、少し面倒だな」

黒装束に身を包んだ男がそう呟く。

「ごめんなさい。侮ったわ」

キジル海瀑でミラを襲った、プレザは皆に申し訳なさそうに謝罪する。

「あの娘がマクスウェルと知っておれば、ワシも『カギ』のありかを吐かせたのじゃがのう」

次に呟いたのは当麻達がハ・ミルで会った大男が言う。

「まあいい。今となっては、泳がせた方が都合がよからう」

「ええ。ラシュガルの目を奴らに向けさせ、我らは静かにことを進めるのが得策かと」

「アグリアから何か連絡は？」

「失われた『カギ』を新たに作成するという動きがあるとか」

「・・・・・・・・捨て置けんな」

男は黒装束の男に目配りをする。

黒装束の男は男の真意を察し、大男に指示をする。

「・・・・・・・・ジャオ、例の娘の管理はもういい。お前は『カギ』の件を探れ」

「いや、しかし・・・・・・・・」

ジャオと呼ばれた大男は黒装束の男の指示に困惑する。

「ラシュガル兵どもが去ったというのなら、もうお前が直々につく必要はない」

「データが無事なんだから、優先事項が変化するのは当然ね」

「う、うむ．．．．．」

黒装束の男とプレザに言われ、ジャオは返す言葉が見当たらなかった。

「プレザ、アグリアと連携をとってイル・ファンに潜れ」

黒装束の男はプレザに指示を出す。

「あら、マクスウェルはいいのかしら？」

「ああ。まだ駒はある。『カギ』のありかも探らせる」

男はそう告げ、村を一瞥して、この場から去るのであった。

（SIDE OUT）

※※※※※※※※※※

現在当麻達はニ・アケリアから出て、キジル海瀑で立ち止まり、これからどうするか考えていた。

「・・・・・・ふむ」

「どうしたの、ミラ？」

「腹が減ったのか？」

「イル・ファンへ船で行けぬ場合はどうするか考えていたんだ。あと腹は減っている」

「減ってるのかよ！もうナップルはないぞ？」

ジュードの質問に答え、さりげなく当麻の質問も返すミラ。ナップルはないと言われたので、ヨダレを少し垂らしながらガツカリしている。

そしてこれからどうするか悩んでいるその時、

「山脈越えは難しいから、ア・ジュールからの陸路の線はないだろうなあ」

どこからか聞き覚えのある声が聞こえた。  
その声のする方を見てみると。

「「「アルヴィン!?!」」」

「サマングン海停からカラハ・シャル方面になるんじゃないか?」

「どうしたの? 一体」

「あのイバルとかいう巫女殿に頼まれてね、三人じゃ心配なんだと」

すると懷から謝礼金の入った袋を出す。

「その上、仕事に見合った以上の報酬をもらっちゃまうのは 特に反するしな」

「ふふ、そうか。心強いよ。アルヴィン」

「うん、ありがとう」

「そりゃどうも。．．．．．ん？あれ、当麻くん、あまりにも再会で声がでないわけ？」

アルヴィンは動かない当麻を見て、ニヤニヤしながら当麻に言う。  
しかし当麻は肩を震えていた。そして当麻は

「．．．．．そうさ。確かに、またいつか会えると思っていたさ。  
近い内にな．．．．．けどな．．．．．」

「？」

「いくなんでも再会早すぎるだろおおおおおおおおお！  
！！！！！！」

そして空に向かって盛大なツッコミを吐き出した。  
このときの当麻の絶叫はキジル海瀑やニ・アケリア中に響いたそう  
な。

今日もキジル海瀑の海は透き通って、景色はとても綺麗であった。

くチャットく

「マクスウェルの里」

ジュ「ここがミラの故郷。案外普通……」

ミ「穏やかないところだろう」

ジュ「う、うん。そうだね」

ア「期待はずれだよなー。もっとおかしなところだと思ったのに」

当「だよなあ。もっとう精霊が沢山いるのと思ったんだが、案外普通だな」



ジュ「それ、ひどいよ」

ミ「ん、なんだ？何をコソコソとしている」

ア「いやあ、この里にはマクスウェル様のご両親とかいるのかなって」

ミ「精霊に親がいるはずないだろう」

当「そうなのか？じゃあミラはどうやって生まれたんだ？」

ミ「今の姿をとったのは二十年前。四大を伴い、この里の社に出現したのだ」

当「神出鬼没だな。てかなんで？」

ミ「ずいぶん私に興味があるのだな、当麻は」

当「いや、別にそういう意味だ」

ア「いやあ。実は当麻君、マクスウェル様の事ゾッコンなんだとさ」

ミ「?。それはどういう意味だ?」

当「だあああ! 一体何をいいだすんですかあ!?」

ジュ「そうだよ。あまりからかっちゃ駄目だよ」

ア「あ、ちなみにジュード君もミラの事ご執心なんだぜ? 普通でつまらないって言うから、もっとミラの面白いこと聞きたーいって!」  
ニヤニヤッ

ジュ「ちょ? アルヴィン!?」

ミ「.....ジュード。君は、まだ波乱を求めるのか?」

ジュ「ちょ.....僕、そんなこと言っていないよ!」

当「てめー! 俺たちに何か恨みがあるのかあ!?」

ア「いやー。マクスウェル様はモテモテだなあー。この先何が起こるか楽しみだあ」

当、ジュ「ア・ル・ヴィ・ン……………」」（、皿）

ア「おっと、素直にトンズラっと……………」

ピューー……

当、ジュ「マテエー」

ピューー……

ミ「……………」ポツーン

ミ「……………」結局二人は私に何が言いたかったのだ？……………」

「大消失」

ア「四大精霊の力を利用した術は、今、使えなくなってるんだよね？」

ジュ「うん。二十年前の<sup>グランロスト</sup>大消失以来だね」

当「グランロスト？」

ジュ「四大精霊の力が突然消えて、世界中がパニックになったんだって」

ア「20年前、俺たち人間達は突然四大精霊の召喚ができなくなつたみたいだ。そしてこの現象を『大消失』グランロストと呼ばれている」

ア「で、ミラが人間の姿になったのは……………」

ミ「二十年前だな」

ジュ「まさか大消失の原因って……………」

ミ「うむ。十中八九私だな」

ミ「私の世話をさせるため、四大を私の専属にしたせいだな」

ア「……………マジで？」

当「ほえー」

ミ「嘘をつく必要などないだろう。もっとも、今は私も奴らを召喚できない。証明はできないがな……………」

当「なら急いで四大精霊達を救いにいかないといけないな」

ミ「……………そうだな。」

「心配だから」

当「改めて宜しくな。ミラ」

ミ「うむ。こちらこそ宜しく頼む」

ミ「しかしホントにいいのか？別に無理に付き合わなくていいのだぞ？」

当「別に無理してるわけじゃないさ、ただ俺はミラの手伝いをしたいただけだからな」

ミ「ふ、君もジュードと同じお節介だな」

当「ほっとけ。でも、それだけじゃないんだけな」

ミ「？」

当「前のミラは四大精霊の力を持ったマクスウェルなんだろう？」

ミ「ああ。そうだな」

当「でも今のミラは四大の力を失った。ただの女の子、て、どこかな？」

ミ「確かにそうだが、私は人間ではなく精霊だぞ？」

当「でも俺から見たら、ミラは世間知らずのお嬢様って感じだな。若干子供っぽいし、オマケに良く食べるし。」ニヤニヤ

ミ「な！？お前まで私を子供扱いするのか？」

当「だって普段は精霊の力を頼って、戦いや移動手段とか色々使ってたんだろ？これはどっから見たって我が儘なお嬢様だろ？」

当「いやー。四大精霊達も結構苦労してんだなあ。」

ミ「……随分言いたい事を言うのだな。そんなに私は子供っぽいのか？」

当「ああ。だからさ」

ミ「？」

当「なんか見てると危なかつしくてさ、見てられないんだよねあ」

ミ「・・・・・・・・そんなにか？」

当「ああ。だからさ、協力するよ。ミラの手伝い」

ミ「・・・・・・・・そうか。」

ミ「・・・・・・・・ありがとう。心配してくれたのだな」

当「あ、ああ。まあそうだな。」

ミ「もしかしたらお前の力を借りるかもしれん。」

当「そんなのお安いご用ですのことよ？ミラさん。仲間なんだからさ」

ミ「仲間・・・・・・・・ふふ。そうだな。これから宜しく頼むよ」

当「おう！」





**第8話 くマクスウェルを祀る里 ニ・アケリアく（後書き）**

次回はサブストーリーを出そうかと思っています。

サブストーリー（ニ・アケリア編／その1）（前書き）

カメヤン!! 「今回は当麻視点でイキマス」

当麻 「サブストーリー出したんだな」

カメヤン!! 「そうですね。本編とは関係ないですけど、少々アホっぽい会話です。主にアンタが」

当麻 「俺かよ!?!」

## サブストーリー（ニ・アケリア編くその1く）

「マクスウエル伝承」

長老「お帰りなさいませ、マクスウエル様」

ミラ「うむ、皆息災だな」

長老「はい。マクスウエル様のおかげをもちまして」

アルヴィン「マジで、ミラ様は信仰の対象なんだな」

当麻「アルヴィン、そのセリフ、何度目だ？」

どうやらアルヴィンはまだミラがマクスウエルってことを信じきれていなかったみたいだ。そりゃ、どっから見たってミラは普通の女性にしか見えないけどさ。

ジュード「マクスウエル信仰が残ってるのは珍しいよ。古代には盛んだったらしいけど」

ミラ「この村にしているとわからないが、世界では、精霊信仰自体が衰えているようだな」

ジュード「うん。精霊術の技術的研究が進んで、精霊は自然の一部  
って認識になってきてるからね」

当麻「それじゃあ昔は、精霊は人間より偉かったとか？」

ジュード「そうだね。伝説では、リーゼ・マクシアをつくったのは  
マクスウェルって言われてるし。そのマクスウェルに従った最初の  
人間が、創世の賢者と呼ばれるクルスニクなんだ」

ミラ「そう。この村の者は、そのクルスニクの末裔なのだ」

当麻「クルスニクか……」

アルヴィン「くくく、田舎にはよくあるよな。そーゆー荒唐無けい  
な言い伝え」

長老「失敬な！二十年前、四大精霊様を従えたマクスウェル様が、  
この村に降臨なされた」

突然長老が怒鳴り、アルヴィンの発言に反論する。アルヴィンは長  
老の話を聞きながらジュードと俺の肩の上に腕をのせ、まるでどっ  
かの金髪グラサンのような意地の悪い笑顔で、ニヤニヤしながら長  
老を見ている。一体何を考えてるんだ……？

長老「以来、食事も睡眠も取らずに成長されたんですぞ」

当麻「……あー……」 (汗)

長老の発言により俺は額に汗をながしなら、内心動揺する。そういえば長老は知らないんだったな……………

長老「この奇跡こそ、村の伝承が真実だった何よりの証拠！」

アルヴィン「このじいさんに、ミラが腹を空かして倒れたって教えてやろうか？」ニヤニヤッ

ジュード「やめなよ……………」

当麻「言ったら長老はどんな反応するんだろうか……………」

きつとこの世とは思えない壮絶な表情になるだろうな。凄く言ってみたいが、ここはグッと堪えることにした。

ジュード「そういえば、ラ・シュガルの名門貴族、六家りくけも。クルスニクと一緒にマクスウェルに従った六人の仲間の末裔を名乗っていますよね？」

長老「ふん、六家の伝承こそ怪しいものだ。奴らには、世界の秘密は伝わっていない……………」

貴族ねえ。正直こういうのわかんねえな。まあこの世界の人間じゃないしな。当然か。

しかし貴族かー。どうゆうもんか一度見てみたいな。あとでジュードに聞いてみようかな。

ミラ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

長老「は！？これは、わしとしたことが・・・・・・・・お許しください」

# 『巫女イバル』

ふと草村付近にイバルとニワトリが向き合っていた。それが無性に気になり、近づいてみる。

ジュード「何してるの？」

イバル「見ればわかるだろう。このニワトリの悩みを聞いてたのだ」

当麻「え？」

ジュード「ニワトリの悩みを!？」

当麻「Ohゝイバル。ミラに嫌われて、とうとうおかしくなったんだな……………」

なんてことだ! そりゃ確かにイバルは見た目からして精神面脆そうだしな。ミラにあんなこと言われたらそりゃ傷つくよなあー。慰めてもらう友達はいないようだし、ニワトリに慰めてもらったのか…………… そんなの可哀想すぎるじゃねーか。仕方ない、ここは上条さんが人肌脱ぎますか…………… 友達<sup>ダチ</sup>になってやるよ…………… イバル……………

イバル「違うわー! ボケ! どう思ったらそんな思考がでてくんだ! ? あと友達ぐらいるわ! 」

そうなのか…………… すまん。

ミラ「イバルは魔物や動物と会話できるのだ」

イバル「村の者を守ることが、俺がミラ様から与えられた使命。例えニワトリであろうとも、大切な村の一員だ」

当麻「へえー。意外と真面目だったんだな。」

イバル「意外は余計だ！．．．ん？．．．．．ふむふむ．．．．．  
・ お気に入りの場所を、別のニワトリに奪われて、ストレスで卵を  
生めなくなったのか．．．．．」

イバル「．．．．．グスッ．．．．．わかる！お前の気持ち、  
よくわかるぞ！」

ニワトリ「コケーーーーッ！！」

ジュード「ほんとに会話してる．．．．．」

アルヴィン「ニワトリと共感してるな．．．．．」

当麻「端から見たら痛い人に見えるんだが．．．．．」（汗）

何も知らない人が見たら、変人、もとい友達がいなししか思えない。  
い。

それにお気に入りの場所を取られたって．．．．．間違いなく俺  
たちの事を指すだろうな．．．．．（汗）  
相当ストレスたまってたんだな。



ミラ「これは特殊な精霊術だ。獣隷術じゅうれいじゆつと言う。会話までできるのは、魔物を使役するア・ジュールでもレアな技術だ」

当麻「へえー。そんなこともできるのかあ！」

上条さんもそういうスキルがほしいなあ。まあ無能力者だからしゃーないか。

まあ、学園都市でもそういった奴はいなかったしな。

イバル「ふっ、会話だけではないぞ。俺は、この力で魔物や動物を自在に使役できるのだ」

マジカヨ。つまりあの○クター○リトルみたいに大量に押し寄せてくるのか！？もしそれが本当ならラ・シュガル兵士達も真っ青だな。

ジュード「すごいね、イバル。いつか詳しくレポートさせてよ」

ジュードも素直に感心している。

イバル「くっ、なぜもつと悔しがらない」

ジュードに妬かせるため自慢気にいったつもりだったのか。妬く所か、むしろ興味を示してるぞ。………ったく普通に仲良くしようとは思わないのか？。

ミラ「そういえば、イバル。お前がアルヴェインに護衛を頼んでくれ

たのだな。気をつかせてすまなかった」

そういえばそうだったな。俺とジュードじゃ、頼りないから、アルヴィンに依頼を頼んだんだったよな。案外いいところあるよなー。

イバル「・・・護衛を頼んだ？俺が・・・ですか？」

ミラ「・・・・・・・・・・・・？」

イバル「・・・・・・・・・・・・？」

あれ？

一同「・・・・・・・・・・・・」

なに？この沈黙！？・・・・・・・・・・・・

アルヴィン「おっと、巫女殿！卵が生まれそうだぞ！」

沈黙を破ったのはなんとアルヴィン

イバル「む、いかん！」

イバル「ミラ様、俺はニワトリたちの縄張り争いを治めてきます。  
ニ・アケリアの平和はこの正義のヒーロー、イバルにお任せください

い」

タタタタタタタッ！！

そしてイバルは瞬時に森の方へと駆け抜けていった。なんてゆうか前向きだな。

ジュード「イバルって真面目な人だね」

アルヴィン「まーな。俺とは大違いだ」

当麻「・・・なあ、アルヴィン。さっきのことなんだが」

俺はアルヴィンに、さっきの依頼のことについて聞いてみる。すると

アルヴィン「おっと！そういうえば、アップルグミがそろそろ切れるんだった。アップルグミはいいぞー！なんせ命の尊さがわかる代物だからな。そんなわけで、ちょっと買い占めておくわっ！」ピュー  
ーーーーーッ

当麻「え！？おい！ちょっとまってよ・・・って、いっちゃまった・・・」

アルヴィンは急に用事があると言い出し、オリンピック並みの速さで走り去り、もう姿が見えなくなってしまった。

ジュード「何か用があったの？」

当麻「え？ いやそれはだな．．．．． いや、なんでもない」

ジュード「？」

ジュードの問いに答えようと思ったが、喋ったら、何かややこしくなりそうな予感がしたので、なんでもないと誤魔化した。

ミラ「．．．．．」

ミラも険しい表情で何かを考えているが、話しかけにくい雰囲気？を出してるせいか、敢えて口にださないことにした。

くチャットく

『巫女イバル』

ア「いやあ、それにしても、あの巫女殿は傑作だったな」

ミ「イバルか？ 少々短気なのが欠点だが、腕は確かだぞ」

当「そうなのか？　とてもそうはみえないんだが．．．．．」

ア「人は見かけによらないってことか」

ミラ「そうゆうことだ」

ジュ「イバルってずっとミラのお世話してたの？」

ミ「うむ。社の掃除や、使いなど熱心にな」

当「ほえゝ。いように使われてんだな．．．．．」  
(汗)

ミ「私の衣装もイバルが考え、しつらえたものだ」

ジュ、当「そうなの(か)！？」

ア「へー。巫女殿、いい趣味だ」

ミ「だろう。動きやすくて私も気に入っている」

当「．．．．．動きやすいねえ．．．．．」

ミ「どうした？当麻」

当「…………いや…………なんでもない…………」

ミ「…………そうか」

当「……………」

当「(あきらかに下心丸見えじゃねえか……………」(汗)

サブストーリー（ニ・アケリア編くその1く）（後書き）

おまけ

当麻「おい！ アルヴィン！！」

アルヴィン「なんだよ、不幸な高校生」

当麻「それをいうな！ それよりさっきのことなんだが、アイツ（イバル）あきらかに依頼のこと、知らなかったよな？」

アルヴィン「さあて、なんのことだか」

当麻「白を切るんだな。まあ色々聞きたいことはあるんだが、どうせ教えてくれないんだろ？」

アルヴィン「さあてな。……………それをいったらオタクも、だろ？」

当麻「！！……………知ってたのか。」

アルヴィン「まあな。結構変わり者だからな、アンタは。ま、お互い事情は事情だし、この話しはオシマイってことで？」

当麻「…………ハア、わかったよ」

アルヴィン「……………」  
アンタ、一体何者なんだ……………」  
しかし、上条当麻、か、



## 第9話 孤独の少女エリーゼ・ルタス（前書き）

カメヤン！！「今日から新しく仲間に入った、エリーゼさんです」

エリーゼ「よ、宜しく．．．．．お願いします．．．．．です」

ティポ「僕もいるんだけどー。忘れるなんてひどいー！」

カメヤン！！「冗談だって。

とにかくやっとな登場だね」

エリーゼ「です．．．．．です．．．．．」

ティポ「ホントだよー、待ちくたびれたー」

カメヤン！！「ホントにスイマセン。

とにかく第9話投稿です！」

ティポ「みてね」

エリーゼ「．．．．．です」

## 第9話 孤独の少女エリーゼ・ルタス

あれから当麻不幸のの絶叫を叫び終わった後、興奮状態の当麻を宥め、なんとか納まることができた。そしてこれからの行き先を考えていた。そして決まった当麻達はまずイル・ファンへ船で行けぬ場合を予測し、別のルートへ行くことに決まった。アルヴィンの助言によりサマンガン海停からカラハ・シャルル方面に決まった。そのためにはまずハ・ミルを通らなければならない。

現在当麻達はキジル海瀑からハ・ミルに向かうのであった。そしてちょうどハ・ミルに到着したのであった。

ハ・ミル西部

「ふう。やっとハ・ミルにもどったな」

「けど、一度来た道だから、そんなに時間はかからなかったね」

「始めて来たときは崖を登ったり、道に迷うわ、露出度の高い獣耳で尻尾付きのコスプレをしたおねーさんがミラを拘束しているわ、挙句の果てには岩に擬態していたモンスターと激戦を繰り広げられるわで……なんつー不幸だ。」

「確かにな。流石にいくら俺でも、ああいう不幸続きは絶対にならない。俺もこういう経験は始めてだ」

「マトモな旅とかままならないなんて．．．．．日記にまとめたら絶対一冊うまるぞ．．．．．」

「う、うん。僕もこういう経験はごめんかな」

「てかミラと一緒にいく時点でマトモな旅なんかできるわけないだろ」

「．．．．．だよな（ね）」

確かにミラと共についてく時点でマトモな旅なんて夢のまた夢だ。案外ミラも当麻と同じ、トラブルメーカー体質をもってるかもしれない。ましては不幸の塊、上条当麻も加わっているので安全な旅なんて限りなく低いだろう。

そしてそんな他愛のない雑談をしながら一番最初にきたハ・ミルの東部へと向う。すると、広場の辺りに人集まりができていた。当麻達は気になり、近づいてみる。すると

「出て行けよ、おら！」

「疫病神！あんたなんかいるからっ！」

「いつになったらこの村からでいくんだよ！」

村の住民達は地面に落ちている石を広い、少女に向けて投げていた。

それを見た当麻達は困惑していた。

「な、なにを．．．．．してるんだ？あいつら．．．．．」

当麻は困惑していた。どうして目の前の少女があんな目にあっているのか、なぜ住民たちは石をもって投げつけているのか。

「きゃっ．．．．．。やっ．．．．．」

「やめて、ヒドイことしないで。お願いだよー！」

ぬいぐるみはそう言うが。住民たちは聞く耳をもたず、石をどんどん投げてくる。そして我慢ができなかった当麻は

「やめろー！！！！」

『『！？』』

気がついたら一歩前に進み、町中で響き渡るぐらいの大声で叫んだ。

「．．．．．てめえら！今自分が何してるのかわかってるのか！  
？寄ってたかってこんな小さな女の子を石でぶつけるなんて．．．  
．．．」

「うるさい！お前たちのせいでこっちは散々な目じゃ！」

「そうだ！そうだ！」

そうやってきたのはこの前宿を泊めてくれたあの優しい村長であった。前と違ってあまりの変わりように当麻達は驚いていた。そして住民は石を拾い女の子に向け、なげようとした。

ガシッ！！

「な！？」

当麻に続いてジュードも住民の腕を掴み抑える。

「くっ！はなせ！」

住民はジュードに掴まれた腕を振りほどく。

「やつ当たりかよ。大人気ないな」

「くっ！よそ者に関わるとロクなことにならん！すぐに出ていけ！」

村長は言い残し、去っていった。村の住民たちもバツが悪そうに散っていく。

「なんでこんなことに．．．．．」

当麻はなんでこんなことになったのかわからなかった。自分達のせいでこんなことになったのはわかっている。正直迷惑かけたのはホントに悪いと思っている。だけどあんな子まで巻き込むのは筋違いだ。

当麻はそう思っていた。

「あ．．．．．」

少女も無言で村の西側の方へ走って去って行く。  
少女の姿が消えてなくなり、一定の沈黙が流れる。そしてミラが話を切り出した。

「私たちは村の者からラ・シュガル軍の動向を聞くとしよう。長くとどまるつもりはない。それを忘れるな。」

「うん。わかってる。ありがとう、ミラ」

それを聞いたジュードはミラに一言礼をいい、ジュードは少女が走っていった方向へ追いかけていった。

「あ．．．．．ちょっと待ってk（ガシッ！）．．．．．アル  
ヴィン？」

当麻がジュードに呼び止めようとしたが、不意にアルヴィンに肩をつかまれる。

「ここはジュード君に任せようぜ」

「……………ああ……………わかった」

アルヴィンにそう言われ、当麻は渋々ながらも了承した。

そして当麻とアルヴィンはミラについて行き、この村の情報収集を行うことにした。

やはり村の住民たちは険悪な表情で当麻達を見ていた。そのおかげで大した情報を得ることはできなかった。

村長もやはり住民達と同じであった。早くでていけと村長は怒り狂った表情で、怒鳴りちらしていた。当麻はそれをブチギレそうになったが、ミラやアルヴィンに押さえられる。ここで事を荒らしたら、情報を手でできないからだ。

なんとか、村長から聞いた情報は、前に助けてくれた大男ジャオ。どうやらジャオのおかげで住民達はあの程度のケガですんだようだ。しかし、ジャオが連れてきたさっきの少女のせいで村は災難続きだったそうだ。いわゆる疫病神。その単語を聞いた当麻は胸にチクリと感じた。

自分は記憶喪失なので覚えていない。だが父親から聞かされた『疫病神』。自分もあの娘と同じような目にあってきたのか。そんな脳裏に頭がよぎっていた。

そして村長の話が終わり、現在ミラ達は村長の家の前でジュードを待っていた。数分後 ジュードが戻ってきた。さっきの少女を連れて。

「みんな！」

「あれ、その子……………」

「・・・・・・・・」

アルヴィンはさっきの少女の事を思い出し、人差し指で、少女を指をさす。その反応で少女は心なしか顔が赤い。どうやら人見知りのようだ。

「ジュード、特に有益な情報はなかった。ここにはもう用はない。すぐにも発つぞ」

ミラはそう言い、さっさと村を出るため、出口へと歩きだす。それをジュードはミラに呼び止める。

「待って、この子のことで話があるんだ」

ジュードはこの子やジャオについて話だした。

数分後

「村長がエリーゼを疎んでることは間違いなさそうだ」

「うむ。村長の態度からもそれはうかがえた。ジャオという男が戻らねば状況はかわるまい。」



「でも、エリーゼはその大きい人、ジャオも友達じゃないって」

「ジャオがいたら閉じ込められて、いなければ疎まれ迫害される．．．．救われないな」

「．．．．．なんだよそれ、酷すぎるだろ。こんなことがあっていいのかよ．．．．．」

あまりにも孤独な少女に当麻は震えながらそう呟く。正直、彼女をなんとかしてやりたかった。当麻はそう思っていた。

そんな中、ジュードは手を顎に当て、ある提案をボソりと呟いた。

「一緒に行けないかな．．．．．」

ジュードの呟きが聞こえたのか、ミラは真剣な表情になる。

「連れ出してどうする？その先のことを考えているのか？私の目的は、わかっているだろう？」

「．．．．．うん．．．．．」

勿論ミラの目的はジュードはわかっていた。わかっていたのだが、このままあの少女をほっとけなかった。ジュードはなんて言えばいいか分からず黙りこんでしまい。重い沈黙が流れる。

ジュードはこの沈黙が数分ぐらい長く感じていた。しかしその沈黙

を破るものがいた。

「なあ。俺もこの娘を連れていってもいいんじゃないか？」

「当麻？」

「……………」

「勿論ミラの目的もわかっている。このままあの娘を連れて行って、危険な目に合わせるかもしれない。そうなるならここを置いてったほうがいい。だけど、ここで彼女を残したら……………彼女は一人生一人ぼっちかもしれない。それじゃあ幸せになんてなれない」

「……………」

当麻の意味深な発言でジュード達は黙りこんでしまう。ミラも当麻の言葉を黙って聞く。

「だからさ、途中まで連れてって、彼女を安全な場所まで送ってやれないか？勿論責任は俺がとる。」

だから

頼む！」

当麻はミラに頭を下げる。

「僕からもお願い」

それに続いてジュードも頭を下げる。

当麻と同じ気持ちだったのか、誠意をこめながら。

「俺からも頼む！」

それに続いてアルヴィンも少々ふざけながら頭を下げる。

それを見たミラは深く溜め息をついた。

「……ハァ……わかった……」

ミラは頭に手をのせ、渋々承諾してくれた。

それを聞いた当麻達は満面な表情になる。

「エリーゼに話してやれ」

「ああ」「うん」

そして当麻とジュードはエリーゼの元へ走っていった。

「意外とやさしいんだな」

「・・・・・・・・正直私にも分からん。断ろうにも断れなかった。」

「へー。俺はてっきり、平然と断ると思ったんだが」

「・・・・・・・・最初はそのつもりだった。が、何故だかわからんが、アイツの真剣な表情を見ると、どうしても無下にできなくてな」

「・・・・・・・・アイツって当麻の事か？」

「・・・・・・・・ああ、一見、ただの平凡な少年にしか見えないが。アイツの真剣な顔を見ると・・・・・・・・なんてゆうか、その・・・・・・・・どうにも調子が狂う」

ミラは己の使命の為なら自らの身の危険を些か顧みない一途な性格の持ち主。

たとえ仲間が足手まといになったり、命を落としたとしても彼女は迷いなく捨てるだろう。元々一人で完遂するつもりだったのだから。

しかし共に旅をしていたせいから分らないが、さっきの、当麻の真剣な表情で迫られると、どういうわけか、頭から抜けることはない『使命』を忘れかけてしまう。そんな感覚だった。

どうしてそうなるのか詳細は不明。

あの少年は一体何者なのか・・・・・・・・

少なくともただの少年には到底思えなかった。

しかし上条当麻の正体は後に知ることになろうとはミラはまだ知る由もない。

そしてミラは無言でそのまま村の出口へ歩いていった。アルヴィンはそれを黙ってミラを凝視したまま何かを考えていた。

その頃、当麻達はエリーゼと話し合い、エリーゼは承諾し、共に決まっていた。

そして当麻達はイラート海停へと向かうため、ハ・ミルを出ることになった。

ハ・ミルを去る際でエリーゼは最後のお別れの為に手を振った。しかし住民たちはそれを答えてくれなかった。

そのせいでエリーゼは悲しい表情になる。当麻とジュードも何も言わずにエリーゼを見つめる。

そしてこの村から去るのであった。

※※※※※※※※※※※※※※※※

イラート間道 南部

「ふうー。

あと少しでイラート海停だな」

あれからハ・ミルから出て。時間が経過した。まず自分達とエリーゼの自己紹介を済まし、イラート海停へと進んでいく。

「エリーゼは疲れてないか？」

当麻はエリーゼに疲れていないか聞いてみる。

「あ．．．．．はい．．．．．大丈夫．．．．．です．．．．．」

「トウマ君！やさしく。」

「そうか？これくらい、普通だと思うが．．．．．」

当麻はこれくらいは常識だと思っていた。しかしその軽い気遣いがあちこちフラグを建てたということをエリーゼや皆はまだ知らない。

## 閑話休題

そしてあと少し進めばイラスト海停に辿り着く。

そんな時だった。

「まてー、なのだ!!」

「待つのであゝる!!」

「ん？」

「お？」

「え？」

「なんだ？」

「なにになにー？」

突如遠くから何か叫び声が聞こえる。ミラ、アルヴィン、ジュード、当麻、ティポは突然だったので思わず、声を表にだしてしまう、すると後ろの方から聞こえてきたので、皆は後ろを振り向く。すると、視界に映った人物が二人居た。

騎士の鎧を纏った小さな騎士、同じく、騎士の鎧を纏った木偶の坊がこちらへ近づいて来た。

）チャット）

『自己紹介？』

ジュ「そういえば、まだちゃんとエリーゼを紹介してなかったね。」

エ「エリーゼ・ルタス．．．．．です」

ア「ヒュー。こりゃ、五年後にはすごい美人になるな」

ア「俺はアルヴィン。そんな時までよろしく、な」キラッ

エ「え．．．．．そんな．．．．．わたし．．．．．」

テイ「あー、これってナンパだー！アルヴィン君はナンパマンー」

当「はははー！ナンパマンだってよ。カッコわりー。」

ア「ほっとけ」

ミ「．．．．．で、このぬいぐるみは、なぜしゃべっている？」  
当「そういえばそうだな。精霊術の何かの類いか？」



エ「え．．．．．？タイプは昔からしゃべってた．．．．．です」

ティ「だよねー」

ミ「私がおかしいのか？」

ティ「ったりまえでしょ」

エ「（コクツ．．．コクツ．．．）」

ミ「うゝむ、ぬいぐるみに反論されるとは不思議なこともあるものだ．．．．．」

ア「不思議って」ヒソヒソ

ジュ「ミラが言うかな？」ヒソヒソ

当「てか、自分が普通だと思っているミラの思考がすごいよな」ヒソヒソ

『ありがとう．．．．．です』

エ「あ、あの．．．．．」

当「ん？．．．．．ああ、そういえば名乗るの忘れてたな」

当「俺は上条当麻。好きに呼んでくれ」

エ「かみじょう．．．．．とうま．．．．．変わった名前．．．．．  
．．．．．ですね」

当「んー。まあこの世界じゃそうかもな．．．．．」

エ「．．．．．え？」

当「いや、こっちの話」

ティ「それよりトウマ君！さっきは助けてくれてありがとうー」

エ「．．．．．ありがとう．．．．．です」

当「．．．．．ああ、そのことか、別にいいよ、お礼なんて。あれは単なる俺のお節介だし」

ティ「でもでも。トウマ君がタンカ切ったとこ、凄くカッコよかったよー」

エ「．．．．．です．．．．．」

当「はは．．．．．ありがとな」

エ「あ．．．．．あの」

当「ん？」

エ「．．．．．え、えと．．．．．その．．．．．」

当「そんなに緊張しなくてもいいぞ。友達みたいに気軽に接してくれて構わないから」

エ「あ．．．．．あの．．．．．私と」

当「ああ」

エ「私と．．．．．と．．．．．とも「友達になつてくれない？」．．．．．あ」

当「あ、ああ。上条さんで良ければ」（汗）

ティ「わーい♪また友達が増えたー♪トウマ君もお友達ー♪」

エ「もう．．．．．ティポ．．．．．私が．．．．．言おうと．．．．．思ってたのに．．．．．（／／／／／）」

当「は、はは．．．．．とりあえずよろしくな．．．．．」（

汗

## 第9話 孤独の少女エリーゼ・ルタス（後書き）

カメヤン「さて、いよいよサマンガン海停だな」

当麻「そうだな、この先、どんな不幸が待ち受けているのやら・・・」

カメヤン「何いってんの、このぐらい、お前の世界と比べたらまだまだマシじゃん？」

当麻「人事だと思って。それでも命がけなんだからな。」

カメヤン「それでもなんとかしてしまうのが、上条さんの凄いところなんだがな。

とにかく次の更新も頑張って行きたいと思います。どうか宜しくお願ひします」

??「までまで！ 私もいるのである」

??「そうだぞ！ 私たちを忘れるなんて酷いのだ！」

カメヤン！！、当麻「誰！？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0326x/>

---

とある幻想殺しのエクシリア

2011年10月26日14時03分発行